

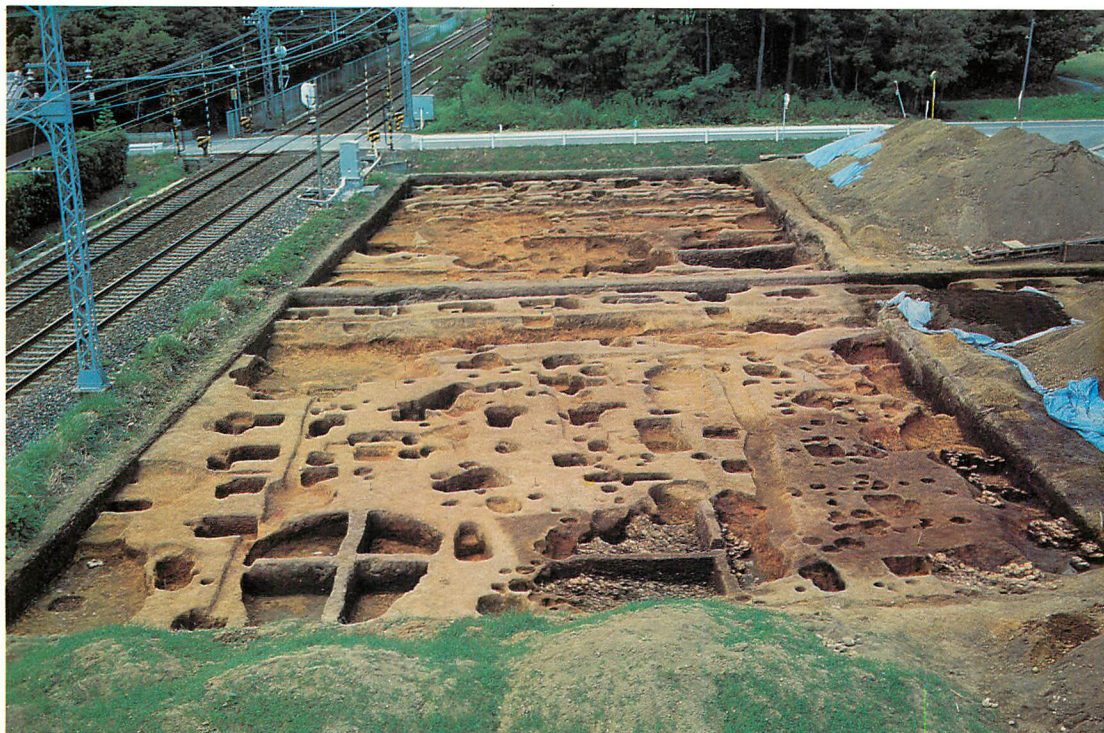
三重県齋宮跡調査事務所年報1982

史 跡 齋 宮 跡

発掘調査概報

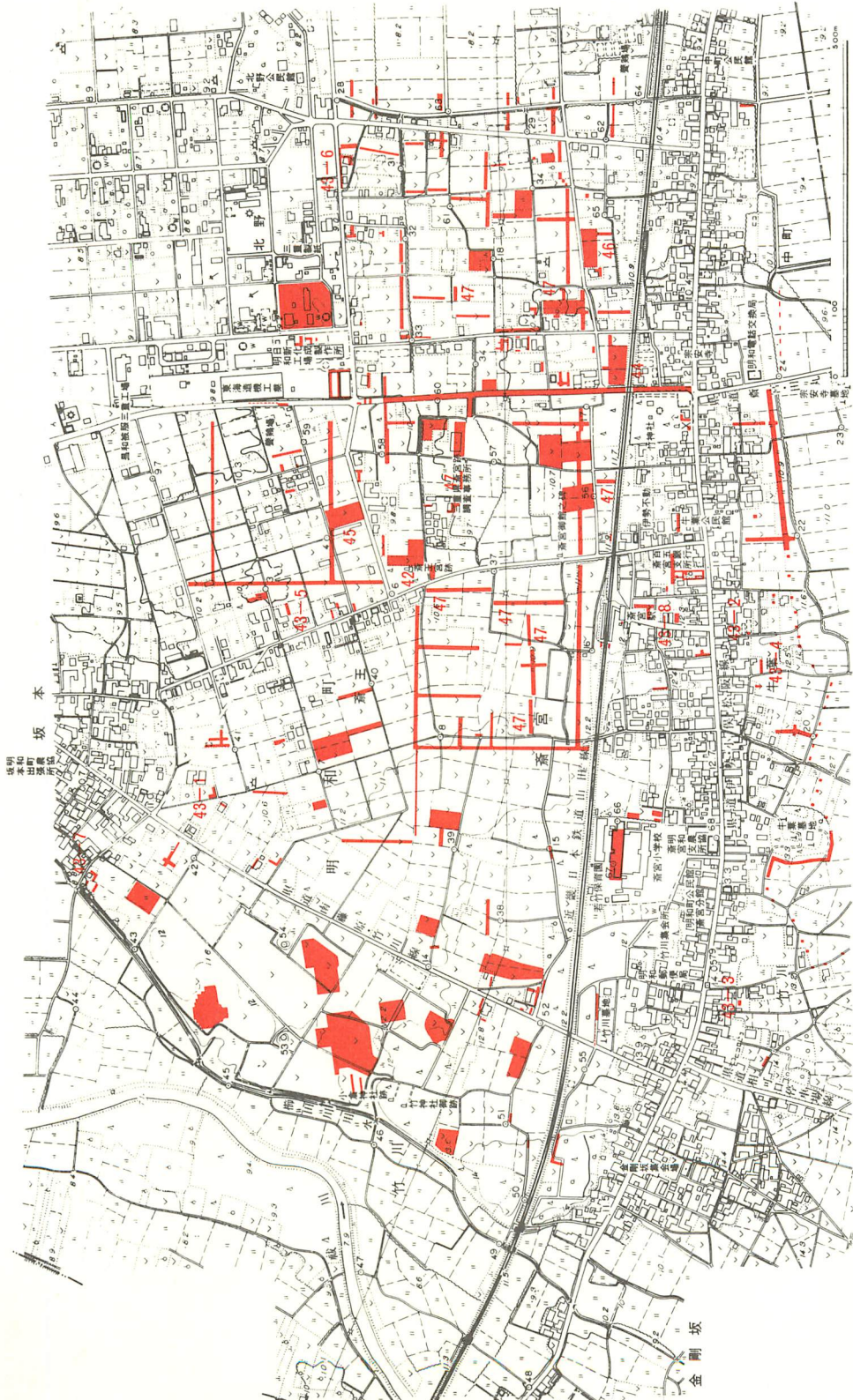
昭和58年3月

三重県教育委員会
三重県齋宮跡調査事務所



第44次調査 全 景（東から）

昭和57年度 発掘調査地区



は じ め に

「ありがとう」の一言は、数多い言葉のなかで一番美しく、そしてどれほど人間社会を明るく和やかにしてくれることでありましょう。

この言葉は“有り得る事が難かしい稀なことだ”ということから「有難う」と言うのだそうですが、史跡斎宮跡の保存も、この一言につきる昨今であります。

昭和54年3月、国の史跡に指定されて以来、斎宮跡も、はや満4年を迎えようとしております。

特に本年度は、昭和54年度策定された保存管理計画に基き、史跡地140ヘクタールのうち、準公有化地区66ヘクタールの土地利用区分を見直し、その公有化有無の方向付けを明示することになっております。

さらに今年度は、史跡の生きた現代活用をはかるため、はじめて史跡環境整備事業を実施することにもなっており、まさに斎宮跡にとっては、その将来を決定する重大な節目を迎えたのであります。

ここにご報告申し上げます昭和57年度の発掘調査は、このような今日的課題に応えるための調査に主眼をおいて実施したのでありますが、幸いにも、所期の目的以上の貴重な成果を得ることができました。

また、古くから斎宮伝承地として親しまれてきた斎王の森の周辺約5,000平方メートルには、遺構の一部復元を含む史跡公園「斎宮跡」を整備し、学びと憩の場として広く見学者や地元住民の多目的な利用に供することといたしました。

この本年度の調査と史跡整備にあたり、種々の有益なご指導を賜った斎宮跡調査指導委員の諸先生をはじめ、文化庁、明和町の関係機関、さらに快く調査地や整備地を提供いただいた地元関係各位に心からの謝意を表する次第であります。

現在、こうした今日までの発掘調査の結果をふまえ、地域の現状との整合をはかりつつ、国・県・町と地元住民・地権者が一体となって、保存管理計画の見直しを鋭意進めております。この難かしい見直しに際して、関係各位とりわけ地元住民と地権者の史跡保存へのご理解とご協力には、唯々有難い感謝の念で一杯であり、今後一層のご盡力を念願して、発刊のご挨拶といたします。

昭和58年3月

三重県斎宮跡調査事務所長

佐々木 宣 明

目 次

I	調査の経過	1
II	第42次調査	3
III	第44次調査	10
IV	第45次調査	20
V	第46次調査	27
VI	第47次調査	34
VII	第43次調査(個人住宅新築等の現状変更緊急調査)	44
VIII	史跡環境整備事業	48
IX	調査事務所要覧	54

例 言

1. 本書は、三重県斎宮跡調査事務所が、国庫補助金を受けて昭和57年度に実施した史跡斎宮跡の発掘調査の概要と事務所要覧である。
2. 第Ⅶ章は、明和町斎宮跡保存対策室が国庫補助金を受け調査主体となって行なった現状変更緊急調査と、原因者負担による現状変更緊急調査である。発掘調査は斎宮跡調査事務所が担当した。
3. 遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第6座標系を基準としている。方位の標示は真北(N5°40'E)を用いた。
4. 遺構標示記号は次の通りである。
SB; 建物 SK; 土壇 SD; 溝 SE; 井戸 SA; 柵 SF; 道路
5. 斎宮跡の調査全般については、元京都大学教授福山敏男氏、三重大学名誉教授服部貞蔵氏、奈良国立文化財研究所所長坪井清足氏、梶山女学園大学教授久徳高文氏、京都府立大学教授門脇禎二氏、名古屋大学教授梶崎彰一氏、皇学館大学助教授渡辺寛氏の指導を得た。
6. 史跡環境整備事業には、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター保存工学研究室長安原啓示氏、三重県教育委員会施設課主査重松俊幸氏の指導を得た。
7. 本概報の執筆・編集は、三重県斎宮跡調査事務所の、佐々木宣明、山沢義貴、谷本鋭次、吉水康夫、倉田直純があたり、森本敦子、岩中美絵子がこれに協力した。

I 調査の経過

史跡斎宮跡の昭和57年度の発掘調査は、計画調査として、第42次、第44次、第45次、第46次の面的調査と、第47次のトレンチ調査を実施した。また、これとあわせて明和町斎宮跡保存対策室が調査主体となり、三重県斎宮跡調査事務所が発掘調査を担当する現状変更緊急調査も行なっている。調査期間は、昭和57年5月6日から昭和58年2月26日まで、調査実施面積はあわせて7,140㎡である。

計画調査は、主に公有化地区（A B地区）の遺構状況の追求と、準公有化地区（C地区）の57年度見直しに対応するため、未調査区域の多い中町北部にひろがるC地区に重点をおいて調査地区を設定した。

第42次調査は、今年度後半に施工した史跡環境整備事業にともなう基礎資料を得るため、斎王の森に東接して調査区を設定して、5月から7月にかけて調査し、平安時代の掘立柱建物、井戸、溝、道路跡等を検出した。また9月には42次の補足調査として斎王の森の前方に調査区をもうけて南北方向の道路跡を検出した。

7月から10月にかけては竹神社北東のC地区で第44次調査を実施し、平安時代の大型掘立柱建物、柵、溝、道路とともに、多量の土器が残る土器溜を検出した。第45次調査は、10月から12月まで、斎王の森北東部の字楽殿において実施し、奈良時代の竪穴住居、円形周溝、平安時代の掘立柱建物、井戸等を検出した。第46次調査は、12月から2月にかけて実施した。調査地区は、中町北部の鍛冶山地区で、平安時代掘立柱建物、柵、溝等を検出した。

トレンチによる第47次調査は、第46次調査と並行して、中町北部と御館、下園地区の区画溝の追求と、斎王の森南方の水田部分の遺構状況を明らかにする目的で実施した。この結果水田部分の遺構は、粘土取りによって破壊された部分の多いなかで、宮ノ前地区西部では多くの掘立柱建物を検出した。

現状変更にとともなう緊急調査は、8件の申請箇所について実施した。調査地点は宮域全体におよぶが、準公有化地区（C地区）で2箇所、準住宅地区（D地区）で2箇所、住宅地区（E地区）で4箇所である。

一方、史跡環境整備事業として、今年は、斎王の森周辺部約4,800㎡について、掘立柱建物、井戸、道路、溝等を復元し、史跡公園化をはかった。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	地 籍・地 番	所 有 者	備 考
42-1	6AEI-D・F	1,200 ^{m²}	57. 5. 6～ 57. 7. 7	明和町斎宮字楽殿 2915-1 他	明 和 町	計画的な調査 A B地区
42-2	6AEK-A・B	250	57. 9.28～ 57.10.15	明和町斎宮字宮之前・ 下園	明 和 町	計画的な調査 A B地区
43-1	6ADC-C	150	57. 5.10～ 57. 5.21	明和町斎宮字出在家 3235-2	永田 忠生	個人住宅に伴う 緊急調査C地区
43-2	6ADT-B	36	57. 5.21～ 57. 6. 9	明和町斎宮字木葉山 308-1	山本 叶	倉庫新築に伴う 緊急調査E地区
43-3	6ACP-T	27	57. 6. 2～ 57. 6.11	明和町竹川字南裏 241-1	辻 喜久男	倉庫新築に伴う 緊急調査E地区
43-4	6ADS-D	43	57. 6.11～ 57. 6.24	明和町斎宮字牛葉 123-3	西山 嘉治	個人住宅新築に 伴う緊急調査E 地区
43-5	6ADE-D	86	57. 7.28～ 57. 8. 2	明和町斎宮字篠林 3220-3	澄野 茂	個人住宅新築に 伴う緊急調査D 地区
43-6	6AGE	80	57.11. 5～ 57.11.13	明和町斎宮字東前沖	明 和 町	町道側溝新設に 伴う緊急調査E 地区
43-7	6ABD-F	60	57.11.24～ 57.11.30	明和町竹川字古里 588-6	今西 直幸	倉庫新築に伴う 緊急調査C地区
43-8	6ADQ-H	175	58. 1.22～ 58. 2.12	明和町斎宮字牛葉 3025-2	大西 修平	駐車場造成に伴 う緊急調査D地 区
44	6AEP-A・B	1,200	57. 7.20～ 57.10.13	明和町斎宮字鍛冶山 2759-1 他	七林 貞次 他	計画的な調査 C地区
45	6AEG-P・Q	920	57.10.14～ 57.12.14	明和町斎宮字楽殿 2904-2	富山 晋 他	計画的な調査 A B地区
46	6AGN-C・D	1,260	57.12.13～ 58. 2.26	明和町斎宮字鍛冶山 2737-1 他	服部 幸生 山上 実	計画的な調査 C地区
47	6ADJ-D・G 他	1,653	57.12.13～ 58. 2.26	明和町斎宮字西加座、 字御館、字宮之前、字上園	服部 幸生 他	計画的なトレン チ調査C地区・ A B地区

第1表 昭和57年度発掘調査地区一覧表

II 第 42 次 調 査

6 A E I - D (楽殿地区) 他

昭和57年度の最初の調査は斎王の森の周辺部で実施することになった史跡環境整備事業に伴う事前の発掘調査である。発掘調査によって検出した遺構の中で適当なものを部分的に復元する予定である。調査個所は斎王の森の東側の畑及び水田と、南側の水田の一部である。斎王の森の東は小字楽殿に南側の水田は宮ノ前と下園に属している。今回の調査地点のすぐ北東側の畑において、昭和48年、第6次Eトレンチの調査を実施しており、南北に走る3条の溝を検出している。

調査個所の標高は畑部分では10.5m～11.0m、水田部分では10.1mである。層序は基本的に第Ⅰ層—耕作土(20cm)、第Ⅱ層—暗褐色土(15cm)、第Ⅲ層—黒色土(20cm)、第Ⅳ層—黄褐色土(地山)となる。水田部分では20cm～25cmの耕作土の下に僅かに黒褐色土、黒色土が10cm～15cmあり、黄褐色土の地山となっている。部分的に耕作土下にすぐ地山となる個所もある。

調査の結果、掘立柱建物7、土壇8、井戸4、溝多数を検出している。水田の個所では部分的に粘土を採掘して遺構が破壊されている個所があった。出土遺物は平安時代より鎌倉時代にいたる土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器などがある。

(Ⅰ) 平安時代初頭の遺構

掘立柱建物1、土壇3がある。

S B 2603 発掘区の北側部分で検出。東側柱は確認出来なかったが、4間×2間の東西棟と考えられる。柱間は桁行2.1m、梁間1.85mで柱掘形は径60cm、深さ30cmの方形を呈する。

S K 2613 発掘区中央部分、径2.2m×2.6m、深さ20cmの楕円形を呈する。黒色土が埋まり比較的多数の土器が出土している。土師器杯、甕、須恵器長頸壺、薬壺などがあり、製塩土器も含まれている。

S K 2618 すぐ東寄りの個所、径1.8m、深さ40cmの円形である。S B 2619の柱穴が重複している。土師器杯、甕、カマド、須恵器甕、製塩土器が出土。

S K 2621 S K 2613のすぐ南、西半部は未掘である。一辺2.7m、深さ35cmの方形を呈する。東側の上部はS D 2628が走っている。先の土壇同様に黒色土が埋まり、土師器杯、壺、甕、須恵器蓋が出土。緑釉陶器片も一点出土。

(Ⅱ) 平安時代前半の遺構

掘立柱建物1、土壇2、井戸1がある。

S B 2602 S B 2603の西に接して検出。桁行は不明であるが、梁間2間の東西棟である。棟方

向は S B 2603 と同様であるが、柱掘形は径45cmと一廻り小さい。

S K 2604　すぐ東、S B 2603 に重複している。径 2 m × 1.3 m の楕円形の土壇が 2 個接した形である。いずれも土師器杯、甕、須恵器蓋、灰釉陶器、製塩土器が出土している。

S K 2620　径 2 m、深さ 50 cm のほぼ円形を呈する。南側の上半部は粘土採掘の際に一部削平されている。黒色土が埋まり、土師器杯、甕、甑、緑釉、灰釉陶器片が出土している。

S E 2622　東西に走る町道の近くで、既に粘土採掘をしてある個所であるが、井戸の部分は粘土が採掘出来なかったため、そのまま残されていたものである。径 1.9 m の素掘の井戸で、深さ 4.5 m を完掘した。上部には黒色土が埋まり、焼土や礫が混在していた。下層では黄褐色土や茶褐色土が互層に堆積している。遺物は土師器、須恵器、施釉陶器、製塩土器が上層からも下層からも多数出土し、底近くからは土師器の甕が 2 個体完形で出土した。

(Ⅲ) 平安時代中葉の遺構

掘立柱建物 S B 2610、S B 2616 と S B 2609 の 3 棟がある。前二者はいずれも 3 間 × 2 間の南北棟で、棟方向も N4° E と同じである。桁行もほぼ同じであるが、梁行は S B 2616 の方が大きい。柱掘形は S B 2610 は方形で、一辺 60 cm とやや大きい、S B 2616 は円形を呈する。柱穴から出土する遺物を見ると S B 2610 の方がやや古そうである。S B 2610 に重複している S B 2609 は桁行は不明であるが、梁行 2 間の東西棟で棟方向はほぼ方位にのる。柱掘形は不整形な楕円形を呈する。

(Ⅳ) 平安時代後半の遺構

掘立柱建物 2、土壇 1、溝 1 がある。

S B 2605 は調査区の北側部分、S B 2604 に一部重複している。4 間 × 2 間の東西棟と考えられる。柱間は桁行 2.6 m、梁間 1.95 m で、柱掘形は 50 cm の円形を呈している。この S B 2605 に重なるように S B 2606 も 4 間 × 2 間の東西棟で桁行の柱間はやや狭いが、ほぼ同規模のものである。土壇 S K 2608 はすぐ南側で、一辺 3.2 m × 2.8 m、深さ 10 cm の方形を呈し、一見竪穴住居とも考えられるものである。黒褐色土が埋まり、土師器杯、甕、灰釉壺、黒色土器などが出土している。S D 2627 は幅 30 cm、深さ 10 cm の南北に走る溝で、土師器杯、灰釉陶器片が少量出土している。

(Ⅴ) 平安時代末葉～鎌倉時代の遺構

土壇 2、井戸 3、溝 7 がある。このうち S K 2612、S D 2614、S D 2628 は平安時代末葉に、S K 2607、S E 2615 は鎌倉時代のものと考えられ、他の井戸、溝からは両時期の遺物が混在して出土している。

土壇には S K 2607、S K 2612 がある。S K 2607 は径 2.8 m × 2.6 m の方形を呈する。焼土を多く含んだ黒褐色土が埋まり、灰釉、緑釉陶器片や土師器杯、黒色土器とともに中世陶器、白



磁も出土している。この土坑の東側部分は貼床状になり、下層からも同様の土器片が多数出土している。S K 2612は2.3m×1.8m、深さ15cmの方形を呈する。土師器杯、甕、灰釉陶器片、土錘などが出土。

井戸は3基ある。いずれも素掘の井戸で、S E 2615は径1.5m足らずの小さなもので、礫を多く含む暗褐色土で、約1m掘り下げた。山茶碗、常滑甕、土師器鍋、瓦器碗などが出土。一方、S E 2623、S E 2624はともに掘形は径4m以上の大きなものである。この個所は地山が白黄灰色の粘質土であり、井戸内は上層部80cm程が黄茶褐色粘質土で廻りの地山と変らない程固くしまっている。その下層は黒褐色土と黄褐色土が混ざる土が埋まっている。この土層より山茶碗を中心に土師器甕、杯、灰釉、緑釉陶器、白磁など多数の土器が出土している。

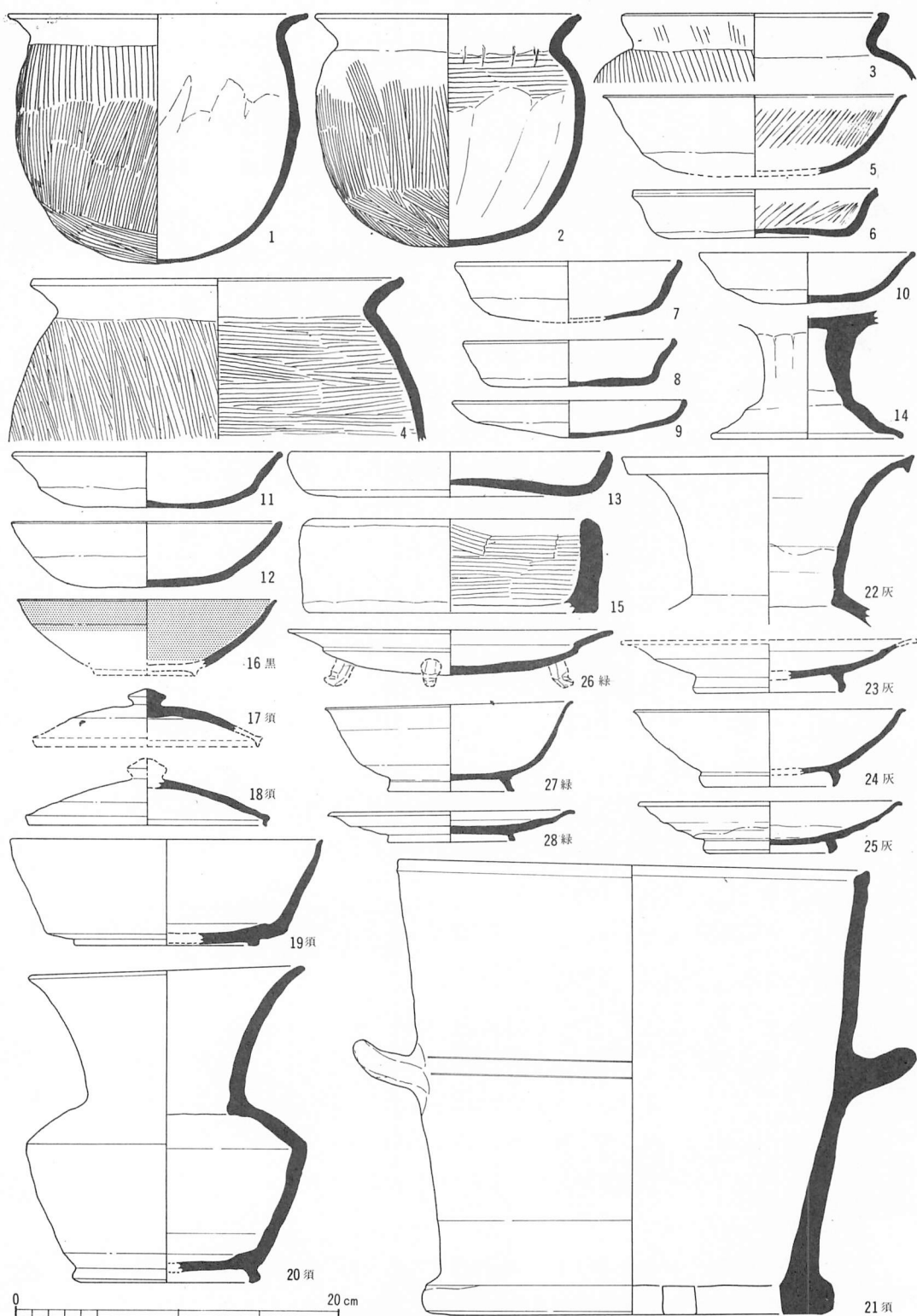
溝は区画溝と小さな細い溝がある。区画溝S D 2625は東西に走る溝で、道路の北側溝である。幅3m、深さ60cmで、溝の方向はE4°Nである。北側にやや浅いS D 2630が重複している。また、S D 2625にとりつくように南北に走るS D 2632がある。道路の南側溝と考えられるS D 1580との間隔から東西に走る道路の幅は約4mとなる。S D 1580はこの個所で南に曲がり南北に走る道路の東側溝となる。幅1.7m、深さ30cmである。西側溝S D 2635も幅1.7m、深さ20cmで、南北に走る道路の幅は4mとなる。第47次のトレンチ調査において、S D 2625の延長部分が検出されていないため、S D 2625は南に曲がりS D 2635につづくものかもしれない。これらの溝からは山茶碗を中心に常滑、渥美製品、天目茶碗、土師器杯、鍋など平安時代末より鎌倉時代にいたる遺物が圧倒的に多く出土しているが、平安時代前半や中葉のものも混在している。この溝の周辺は全て粘土採掘されている。

以上の区画溝のほか幅50cm前後の溝が数条見つかっている。S D 2601は発掘区北端部分で南北に走る溝である。幅僅か35cm、深さ15cmである。S D 2614はS K 2612を横切る形で東西に走り、幅50cm、深さ7cmで茶褐色土が埋まる。すぐ東側のS D 2619につづく一連の溝かもしれない。またS K 2621の上層を南北に走るS D 2628も幅60cm、深さ15cmで、黄褐色土を多く含む茶褐色土が埋まり土師器杯や山茶碗が出土している。

(VI) 遺物

約1,400m²の発掘調査であったが、比較的多数の遺物が出土している。それらは平安時代初頭より鎌倉時代にいたるものである。平安時代初頭と考えられるS K 2613では斜行暗文の施される土師器杯が長甕とともに、須恵器、高杯、四耳壺など折戸10号窯式と考えられる土器群が出土している。新しい所ではS D 2625からは鎌倉時代および室町時代の土師器鍋、瀬戸摺鉢、白磁碗などが出土している。

比較的纏って出土したS E 2622からは整理箱約15箱の土器が出土している。殆んどが土師器で他に須恵器、灰釉、緑釉陶器、少量の黒色土器、製塩土器などがある。緑釉陶器は形の窺え



第2図 第42次出土遺物 SE2622

るものは6点あり、脚を欠くが三足盤の出土は初めてである。須恵器の甗もめずらしいものである。これらは黒笹14号窯式と考えている。

一方、S E 2623、2624は掘形径5 m程の大形の井戸で、平安時代末から鎌倉時代にかけての遺物が多量に出土しており、滑石製の石鍋が1点含まれている。

・(VI) ま と め

古くより斎王の森として語りつがれてきた個所での発掘であり、調査の結果が期待されるところであった。検出した遺構・遺物は平安時代より鎌倉時代にいたる各時期のものがあつた。しかし、それらは他地区の発掘結果に比較してみると、決して特異なものではない。むしろ、御館、柳原、鍛冶山といった地区の方が、当地区より規模が大きいものが多いといえる。今年度、調査をした同じ楽殿地区（第45次）と相通じるものがある。小規模ながら平安時代全体を通じて、掘立柱建物は建っていたが、御館、柳原地区に存在する大形掘立柱建物とはその役割は異なるものであろう。しかし、平安時代前半の井戸からは多量の緑釉陶器が出土しており、当地区の緑釉陶器の出土数は他地区に比べ多い方であり、決して一般の外院的な個所とは考え難い。

一方、S D 2625は現在の神宮所有地の部分にも及び区画溝および道路はこの部分で南に曲がるかあるいはT字形になるものと思われる。それは今年度の第47次のトレンチ調査において、S D 2625の延長部分が確認されなかったことから窺える。鎌倉時代にはこの斎王の森部分がある区画のコーナーにあたっていた。しかし、これまで区画溝と呼称されてきた2条の並行して走る溝は大部分は小字の境界部分を走っている。そして、この斎王の森部分は下園、楽殿、宮ノ前、篠林の四つの小字の境界部分である。今回の調査においてS D 1580からは一部平安時代前半の遺物が出土しているが、大部分は鎌倉時代、室町時代の遺物が多量に出土している。小字の区別はこの時期まで遡るものといえそうであるが、何故、この個所が後世に斎王の森と呼称されるようになったか不明である。

さらに、今回の調査では部分的に粘土採掘されている個所があつた。これは斎王の森の前の水田部分がかつて粘土採掘によって既に遺構は全て破壊されてしまっているのではないかという危惧を裏付けるものであつた。しかし、粘土採掘のために地山上面まで掘り下げた際に井戸や土壇、溝が存在すると粘土採掘を止めており、遺構は充分残っていることが判明したことも今回の調査の大きな収穫であつた。

Ⅲ 第 44 次 調 査

6 A F L - A ・ B (鍛冶山地区)

竹神社から近鉄線をはさんで北東に隣接する鍛冶山地区西部ではこれまで昭和50年度に実施した松阪広域市町村圏道路新設に伴う事前の発掘調査によって大型の柱穴をもつ掘立柱建物や溝が検出されている。また昭和54年度に実施したトレンチ調査では大型柱穴のほか、土師器の杯・皿が大半を占めるおびただしい量の土器を出土する土壇が集中して検出された。これらの調査成果からこの地域は一時期の斎宮における中枢部かまたはこれに近い性格をもつ一画であることが予想された。

このため今年度の面的発掘調査の1ヶ所として昭和54年度のトレンチ調査区から近鉄線にわたる部分の地区での土壇群の広がりや掘立柱建物群の配置とその性格等を知ることを目的として東西約50m、南北約18～23mの調査区を設定して発掘調査を実施した。なお調査の進展に伴ない調査区中央を南北に続く柵が検出されたためこの北側で延長部分の状況を知るため約16mにわたって幅4mの南北トレンチを設定して補足調査を行なった。

(Ⅰ) 平安時代前半の遺構

掘立柱建物5棟(S B 2680・S B 2690・S B 2699・S B 2700・S B 2705)、柵2条(S A 1411・S A 2675)溝2条(S D 2660・S D 2670)のほか土壇21ヶ所(S K 1412・S K 1414・S K 1415・S K 1419・S K 1424・S K 1425・S K 2659・S K 2676・S K 2683・S K 2684・S K 2686・S K 2687・S K 2695・S K 2696・S K 2697・S K 2698・S K 2701・S K 2702・S K 2704・S K 2706・S K 2708)を検出した。

5棟の掘立柱建物のうちS B 2699は1辺0.7m前後と斎宮跡では中規模の柱穴をもつ建物であるが、その他の建物はいずれも1辺1mを超える大型の柱穴をもつ建物である。また掘立柱建物の柱穴の相互に重複関係をもつのはS B 2690とS B 2699の2棟のみであるが、その前後関係はS B 2690が後出の建物と思われる。そのほか柱穴の重複はないものの、建物自体が重複するS B 2700とS B 2705の存在や建物相互の位置関係から平安時代前半とした掘立柱建物の中にも少なくとも2時期以上の差があるものと考えられる。一方S B 2690は東側に廂をもつ南北棟であるが、その北に位置する5間×2間の東西棟S B 2680の西妻の柱列とS B 2690の西側柱列とをそろえて配されていることから規格性をもって配置された建物であろう。

柵は当地区でS A 1411・S A 2655・S A 2675の3条を検出し、いずれも柱穴からの遺物出土量がほとんどないため明確とはいえないが一応S A 1411とS A 2675を平安時代前半とした。両者の重複関係はS A 1411の柱位置をわずかに北へずらせて建て替えが行なわれたものであり、

S A 2675は後出の平安時代中葉とした掘立柱建物S B 2685や土壇S K 2650と並存する可能性も考えられる。またこれらの柵がS D 2670と約6 mの間隔をへだてて並行することと、これまでの斎宮跡発掘の成果から今次調査区の畑の北側隣接地に東西方向の道路跡の所在することが明らかである等のことからS A 1411及びS A 2675は調査区北端の柱穴から多くとも数間の柱穴を経て東へ屈折するものと考えられる。

溝でこの時期のものとして明確なものはS D 2660とS D 2670の2条であるが、いずれもこれまでの広域市町村圏道路新設に伴う事前調査や昭和51年度に個人住宅建設に伴って実施した第13-8・9次調査区の溝とつながり斎宮跡を南北に貫く溝である。このため2条の溝で挟まれた幅約11 mの範囲は平安時代後半以後の土壇・井戸等で凹凸が多くなっているが、少なくとも平安時代前半には斎宮跡の主要部を区画する道路であろう。

次に土壇は規模・形態とも様々であるが21ヶ所を検出している。これらのうち調査区東半部北辺で検出した土壇群はその大半を昭和54年度のトレンチ調査ですでに検出しているが、いずれも土師器の杯・皿が大半を占める多量の土器を出土し、当調査区周辺の性格を特徴づける遺構である。一方調査区南東隅に検出したS K 2696・S K 2698などは逆にほとんど土器片を出土しない土壇であり両者を対比して考える必要があろう。またS K 1412・S K 2683・S K 2684・S K 2686・S K 2687等の土壇はいずれも3 m×2 m前後の南北に長い楕円形の土壇で規模・形状等が似ているうえ南北にほぼ一定間隔で並んでおり、その上層に重複する平安時代末葉の溝S D 2682や柵などと同様当地区を区画する施設の一部であろうか。

(II) 平安時代中葉の遺構

この時期と考えられる遺構には掘立柱建物3棟(S B 2685・S B 2691・S B 2692)、溝3条(S D 2652・S D 2689・S D 2693)、土壇3ヶ所(S K 2657・S K 2650・S K 2688)等がある。

掘立柱建物ではS B 2685が大型柱穴をもつ桁行5間の東西棟であるが、S B 2691・S B 2692の2棟は径40 cm前後の小規模な柱穴の建物である。建物・柱穴の規模等から推定すればS B 2685に伴う規格的に配置された建物群が東や南の調査区外に存するのであろうか。

溝は3条のうち調査区東半の東西溝S D 2689とS D 2693とも小規模な浅い溝でその性格も明らかなものではない。しかし調査区西半部の南北溝S D 2652は平安時代前半とした南北方向の道路に沿う西側の側溝S D 2660を掘り直したものであろう。

土壇は平安時代前半に比べわずか3ヶ所を検出したのみであるが、その性格のうえでは類似したのが見られる。すなわちS K 2688は平安時代前半のS K 2696・S K 2698と同様土器がほとんど出土しない土壇であり、S K 2650は多量の土器を出土した土壇である。とりわけS K 2650出土の土器全体の量に占める割合の点ではわずかであるが多数の緑釉陶器・黒色土器等の混在は特筆すべき点である。

(Ⅲ) 平安時代後半の遺構

平安時代前半から中葉の遺構が比較的調査区東半部に集中するのに対し、平安時代後半以降の遺構は調査区西半部に集中している。しかしこの畑では各時期の土壇が重複しているうえに耕作に伴う攪乱や削平が著しく、遺構の状況を十分には把握し難いところもあった。このため平安時代後半とした遺構は少なく、掘立柱建物1棟（S B 2653）、土壇2ヶ所（S K 2668・S K 2669）を検出したのみである。

S B 2653はかろうじて攪乱をまぬがれた小規模な柱穴から3間×2間の南北棟と考えられる掘立柱建物である。

土壇は2ヶ所とも上部を削平され、規模・形状とも不明確であるが、両者は近接しているところから一体の土壇であることも考えられる。

(Ⅳ) 平安時代末葉の遺構

掘立柱建物1棟（S B 2654）、柵1条（S A 2655）、溝1条（S D 2682）のほか土壇9ヶ所（S K 2651・S K 2662・S K 2663・S K 2664・S K 2666・S K 2667・S K 2674・S K 2677・S K 2678）等を検出した。

S B 2654は3間×2間の東西棟であるが、平安時代後半としたS B 2653と類似した柱穴をもつ掘立柱建物である。

柵（S A 2655）は調査区西端で一辺1 mを超える大型柱穴が南北に7ヶ所並んで検出されたものである。付近には平安時代後半から末葉の遺構が集中して重複しているためか柱穴からわずかながらこの時期と考えられる遺物が出土しているため一応平安時代末葉とした。しかし、平安時代前半から中葉としたS A 1411・S A 2675と次のような共通点が認められる。(1)道路跡とその側溝（S D 2660・S D 2670）を挟んで位置する。(2)柱穴の規模が類似する。(3)柱間が約2.95 mと一致する。(4)柱方向がN3°Wと共通で並行する。以上のような諸点を考慮すればS A 2655はS A 2675と並存して平安時代前半から中葉の遺構である可能性も十分に考えられる。

溝は調査区中央を南北に貫くS D 2682を検出したのみである。当初S A 1411・S A 2675とほぼ並行するところからこれに伴うものかとも考えられたが時期的に異なることが明らかとなった。

土壇は9ヶ所を検出したがその上部は削平され、多数が重複しているため規模・形状とも不明瞭である。遺物の出土量はいずれも比較的少ない。

(Ⅴ) 鎌倉時代の遺構

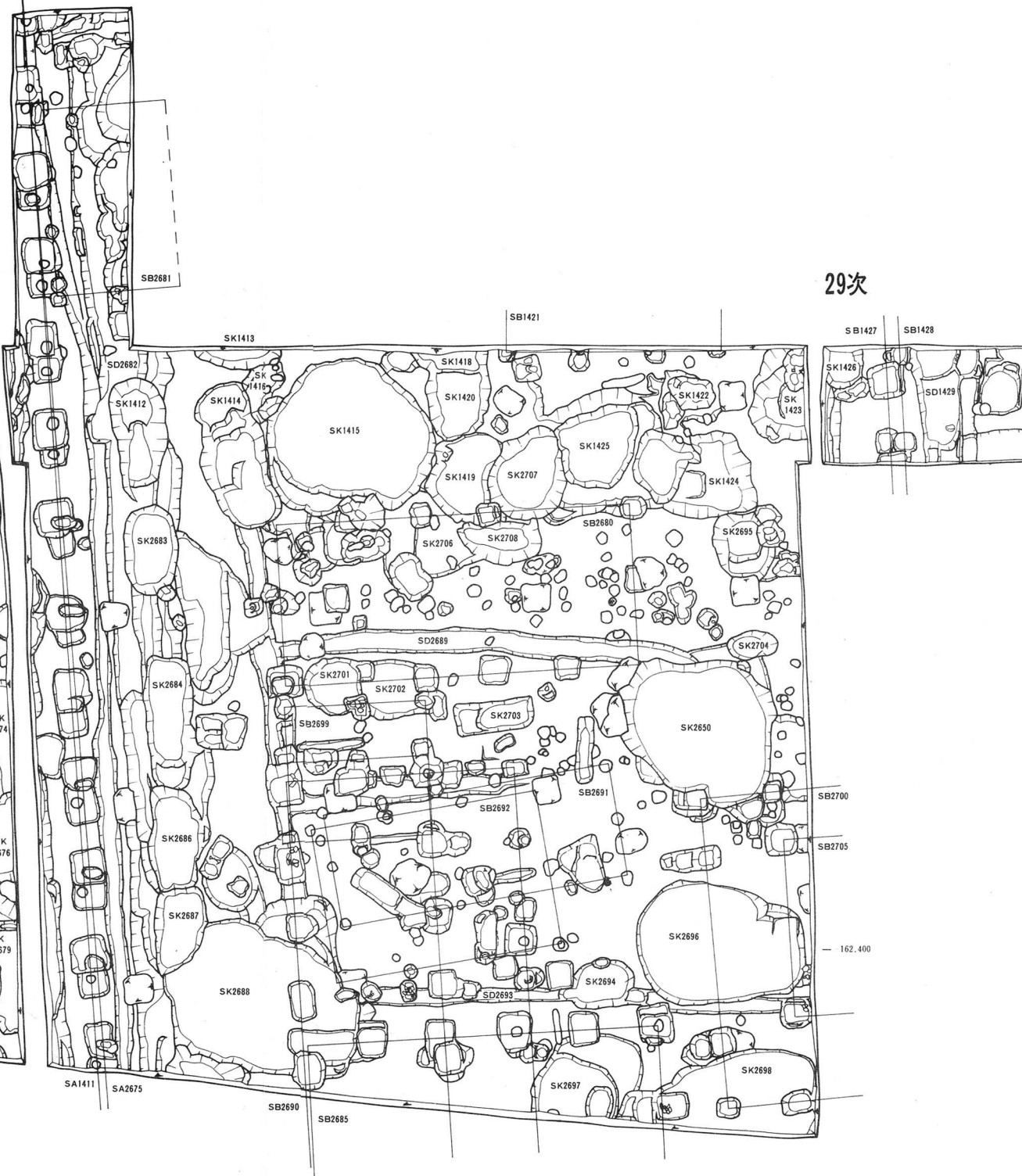
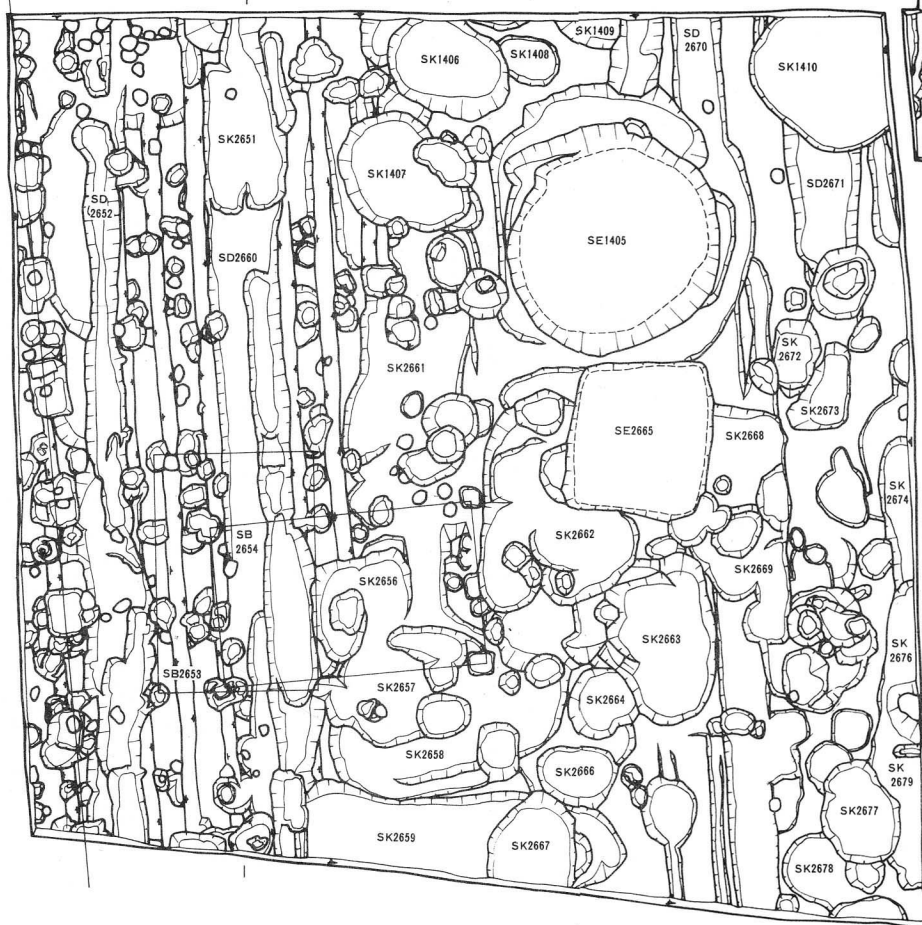
井戸2基（S E 1405・S E 2665）と土壇1ヶ所（S K 2661）を検出したのみである。

井戸2基のうちS E 1405はその一部を昭和54年度のトレンチ調査で検出しているが、トレンチの南壁に沿って検出されたため土壇と考えていたものである。検出面で径約6 mの円形を呈



SA2655

57.100



A horizontal number line is shown, starting at 0 on the left and ending at 10m on the right. There are tick marks at 0, 2m, 4m, 6m, 8m, and 10m.

する大型の掘り方をもつ。一方 S E 2665 は一辺約 4 m の方形で整然とした掘り方をもつ。2 基とも諸般の事情から完掘することはできなかった。

土壇は S K 2661 を検出したのみである。他の遺構と同様ほとんど削平されているため形状・規模とも不明である。

(VI) 遺物

当調査区の遺物出土量は非常に多く、その大半が土壇群から出土する土師器の杯・皿等である。中でも平安時代前半の土壇では S K 1424・S K 2695 が、平安時代中葉の土壇では S K 2650 が特に多量の出土を見た。S K 1424 ではこれらの土師器とともに陰刻花文のある緑釉の蓋 2 点をはじめ碗・皿等の緑釉陶器数点や灰釉陶器も出土している。S K 2650 でも同様に多量の土師器とともに二彩の稜碗をはじめ、碗・稜碗・皿・段皿・耳皿・唾壺・浄瓶・香炉蓋等の緑釉陶器 53 点のほか須恵器、灰釉陶器、黒色土器等も出土している。

特殊な遺物には二彩陶器、緑釉陶器のほか S K 2650 から出土した黒色土器の中に 2 点の風字硯や薬壺があげられる。また S B 2685 の大型柱穴の埋土からは水晶製と思われる双六の駒が 1 点出土している。

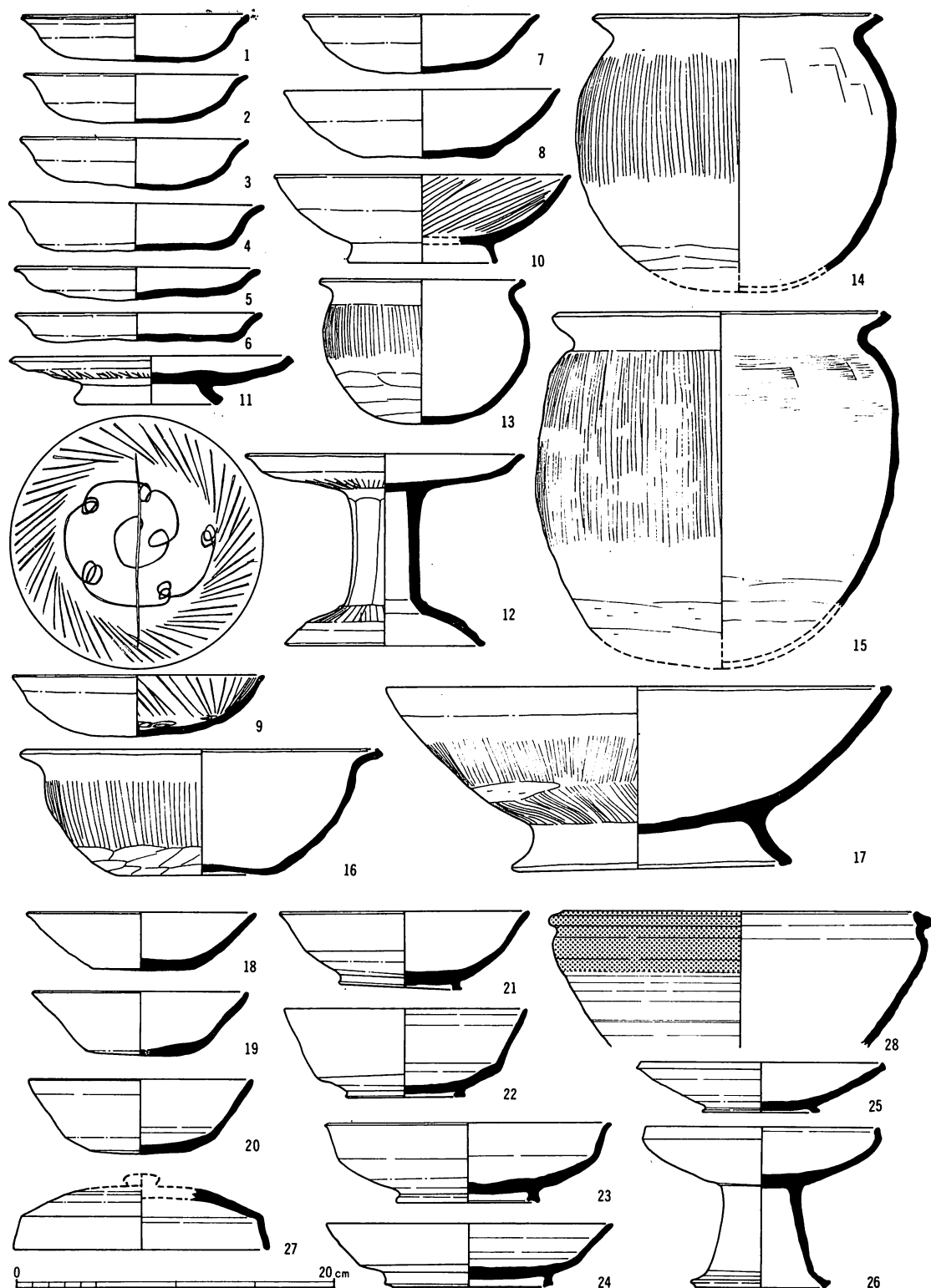
(VII) まとめ

今回の鍛冶山地区の調査でも多くの貴重な成果が得られたが、中でも当調査区を特色付ける大型柱穴をもつ掘立柱建物群、道路跡とこれに並行する柵、夥しい量の土器を出土する土壇群等に若干ずつふれてまとめとしたい。

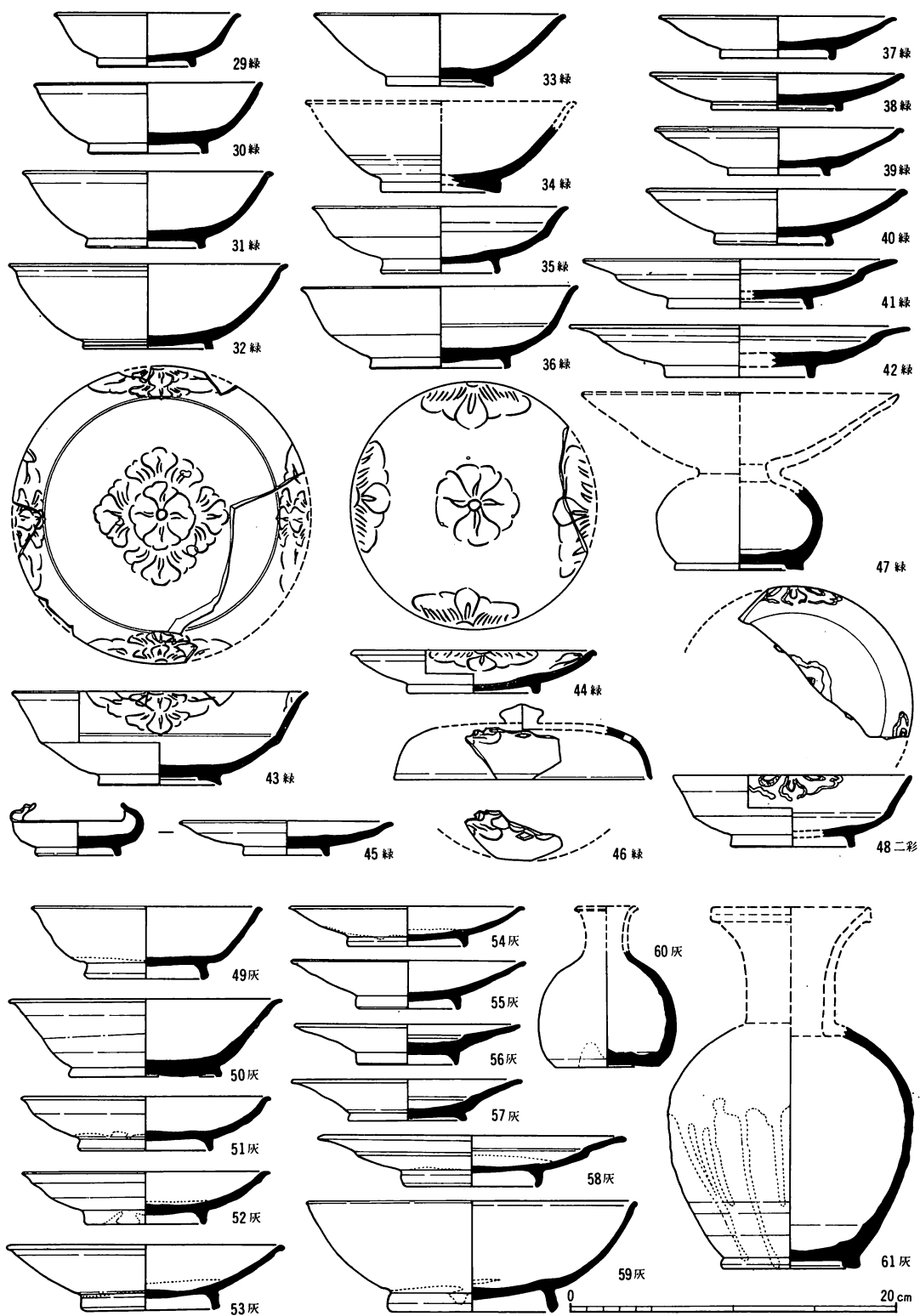
当調査区西半の北約 20 m には齋宮跡を区画する地割の交点が存在することは図上から予想され、今回の調査でも南北方向の道路跡が確認されたことで明確である。このため当調査区は整然とした地割のなされた区画の北西隅に相当している。今回検出した大型柱穴の掘立柱建物は 5 棟にすぎないが、区画における調査区の位置から推定すればさらに東及び南に整然とした配置を示す大型建物群の所在が容易に推定されよう。とりわけ東西棟の S B 2680 と南北棟の S B 2690 は整然と直交する棟方向を示し、S B 2680 の西妻柱列と S B 2690 の西側柱列をそろえている。南北棟である S B 2690 の東側に廂をもつ。このような点から調査区以東に中軸線を想起できよう。

つぎに 3 条の柵のうち S A 2655 は時期について若干の疑問が残るものの S A 1411 及び S A 2675 は道路跡に並存するものと考えて大過ないであろう。これまでの調査で道路にそって柵を周らせる区画は当調査区のほか、広域市町村圏道路新設に伴う第 10 次調査の竹神社東地区と後出の第 46 次鍛冶山地区の 3 ヶ所が知られるのみである。当調査区の東及び南に広がる建物群の齋宮寮における重要性をうかがわせる遺構である。

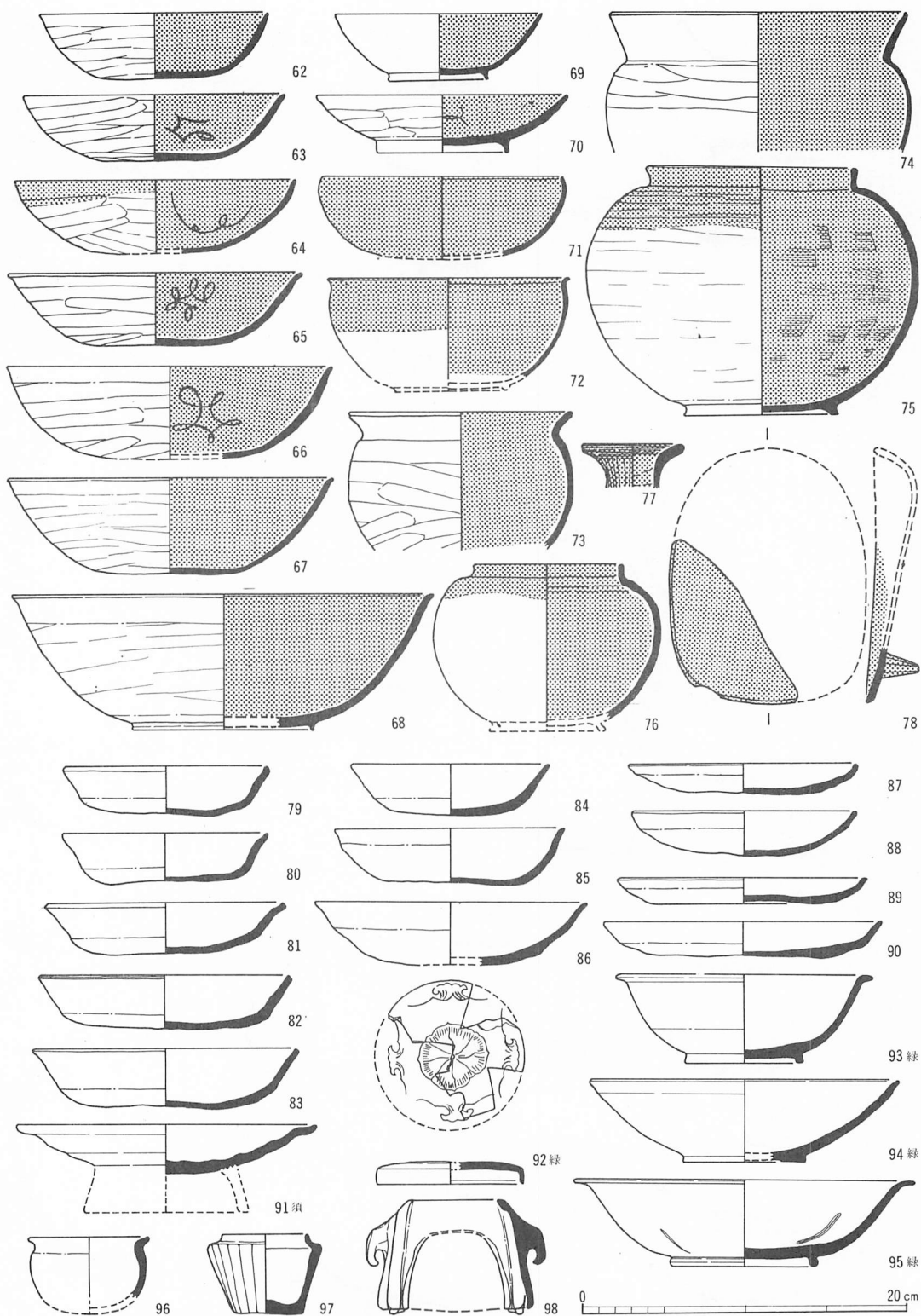
また 2 条の重複する柵のうち先行する S A 1411 の各柱穴では柱痕跡を、後出の S A 2675 の各



第4図 第44次出土遺物 S K2650 須恵器、18~28



第5図 第44次出土遺物 S K 2650



第6図 第44次出土遺物 SK2650、62~78 SK1424、79~95 SK1425、96
SK2706、97 SK1415、98

柱穴では柱のぬき跡を検出した。柱穴はS A 1411で13ヶ所、S A 2675で12ヶ所あり各柱間の計測値は両者共2.96m前後であり、各柱間を1丈とするとこれらの柵造営に使用されたものさしは1尺=29.6cm前後となる。これまで斎宮跡の中心的建物の所在、建物配置や地割の基準等全く不明であったがこれらの究明にとって貴重な手がかりとなろう。

土壇は夥しい量の土器を出土する土壇の所在が当調査区の特徴でもある。平安時代前半の土壇で最も遺物出土量の多いS K 2695で土師器の杯・皿・碗は遺物整理箱（ ${}^L57\times{}^W37\times{}^H10\text{cm}$ ）で62箱、S K 1424でトレンチ調査時の遺物も含め52箱、平安時代中葉のS K 2650では302箱にもものぼる。これらは完形品を多く含むため水洗後の乾燥重量から推定してS K 2695で約2600個体、S K 2650では約20000個体に及ぶものと思われる。S K 2650から出土した遺物にはこれら20000個体の土師器の杯・皿・碗のほかは土師器甕18、鉢12、高杯5、黒色土器碗9、皿1、鉢4、甕3、薬壺3、小瓶1、風字硯2、須恵器28個体、灰釉陶器52個体にすぎず、総計でも0.7%にすぎない。また土器とともに鉄釘が若干出土していることから緑釉陶器等は木箱に一括して投棄されたものであろう。

このような多量の土器から使用におけるセットをうかがい知ることにはできないが、他の土器等をほとんど出土しない土壇の所在もあわせて考える必要があろう。

最後に当地区の柵に囲まれた大型の建物群と祭祀を想起させる土壇の所在する一画の斎宮寮における重要性がより具体的に明確化されることを期したい。

Ⅳ 第 45 次 調 査

6 A E G - P ・ Q (楽 殿 地 区)

今回の調査地は斎王の森より北東へ約 150 m、ほぼ楽殿地区の中央部に位置する。調査地北部では、昭和48年度の宮域範囲確認調査（Cトレンチ）において、奈良時代の溝や鎌倉時代の遺物を確認しており、今回の調査はこれらの遺構、遺物の広がりをも明確にし、宮域中・東部において明らかになりつつある区画溝の北方外縁部の状況を把握することを主たる調査目的とした。

調査の結果、掘立柱建物 4、竪穴住居 2をはじめ、溝、土壇、井戸、円形周溝、方形周溝遺構などを検出した。これらの大半が奈良時代と平安時代末葉から鎌倉時代にかけての二時期のものである。

(Ⅰ) 奈良時代の遺構

竪穴住居 1、土壇 3、溝 1、円形周溝 2 がある。

竪穴住居 S B 2726 は 2.4 m × 2.2 m の小規模なもので、西壁を溝 S D 2723 に切られているが、この溝の西側でカマドとしての焼土面の高まりの一部を検出した。

円形周溝 S X 2735 は内径約 13 m、溝幅 1.4 m ~ 2.2 m、深さ 35 cm ~ 52 cm を測る。地山面は周溝の内側が調査区の中では最も高く、北と南側は徐々に低くなっており、S X 2735 は地形的にやや高い場所に立地していたことがわかる。周溝の規模、占地の問題などからすれば古墳の削平跡ではないかと考えられるが、周溝埋土内からは、古墳時代の遺物は 1 点も出土しておらず、奈良時代初頭頃の土師器杯・皿・台付皿・甕・カマド、須恵器杯蓋・壺などが若干出土しているところから、奈良時代の遺構として取り上げた。調査区南東隅で検出した S X 2760 も同様な円形周溝と思われる。周溝埋土からは、奈良時代初頭頃の須恵器杯底部が 1 点出土した。

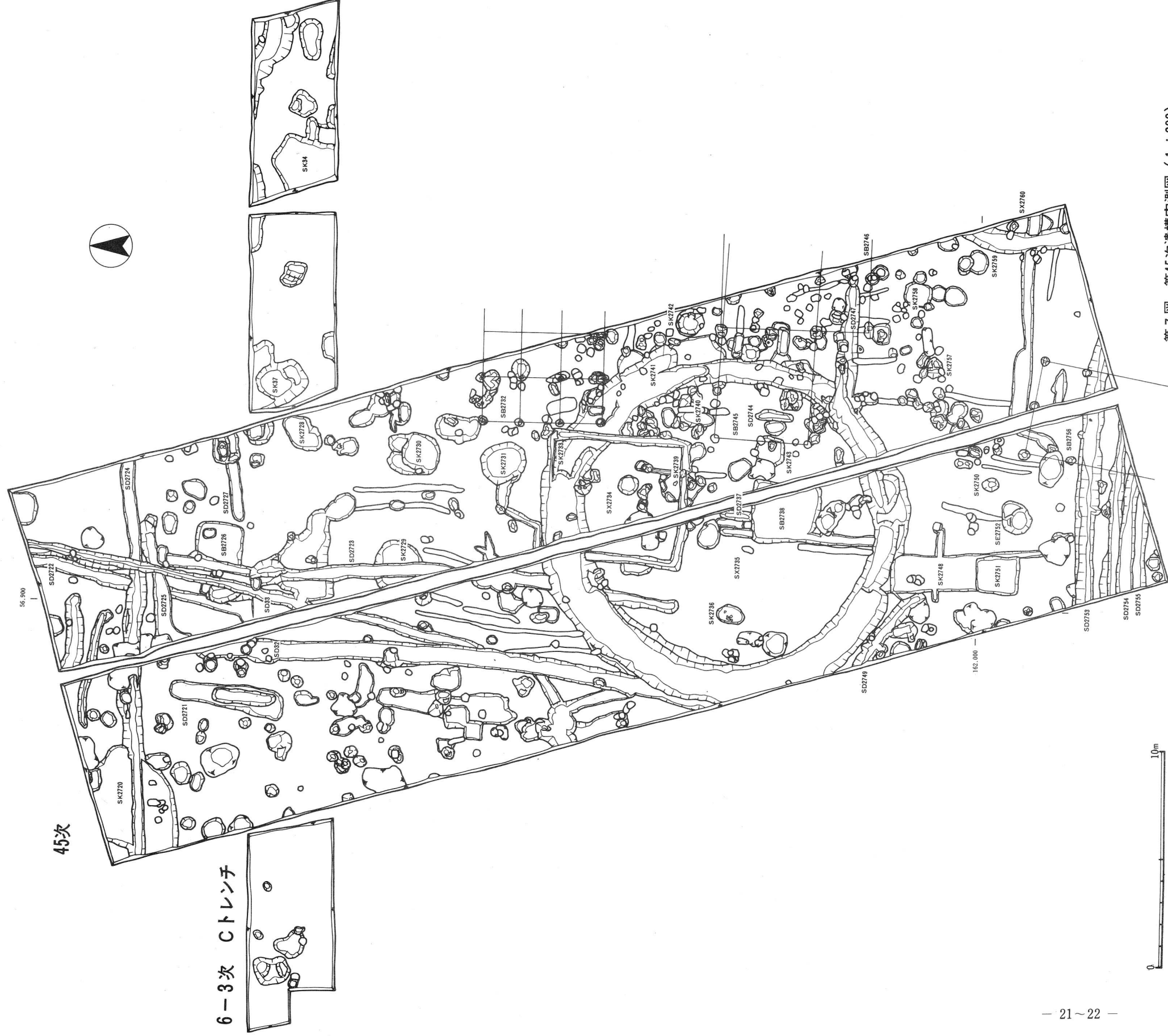
溝 S D 33 は、C トレンチでその一部が検出されていたもので、調査区北部を斜めに走り、S X 2735 の北側で西へ折れる。おそらく S X 2735 が意識されていたのであろう。溝幅 50 cm、深さ 25 cm 前後で、北端部は鎌倉時代の溝 S D 2723 と重複する。

この時期の土壇には、北から S K 2720、S K 2729、S K 2757 がある。土壇の規模は大小様々であるが、いずれも土師器杯・皿・碗が少量出土したにとどまる。

(Ⅱ) 平安時代後半の遺構

掘立柱建物 1、土壇 2 のみを検出した。

掘立柱建物 S B 2746 は、3 間 × (2) 間の南北棟で調査区外へ延びる。柱掘形は径 50 cm ~ 60 cm で今回検出した平安時代末葉の建物に比べてやや大きい。



第7図 第45次遺構実測図 (1:200)

土壇はこの建物の北と南にある。北側の S K 2742 は径 1.3 m、深さ 50 cm の円形土壇で、南側の S K 2758 は 1.3 m × 1.1 m、深さ 15 cm で方形を呈する。いずれも少量の土師器杯・甕、灰釉陶器碗の破片が出土。

(Ⅲ) 平安時代末葉の遺構

掘立柱建物 2、竪穴住居 1、溝 6、土壇 6、方形周溝遺構 1 がある。

掘立柱建物 S B 2745 は (4) 間 × 2 間の東西棟、S B 2756 は (2) 間 × 2 間の南北棟でいずれも調査区外へ延びる。柱掘形は 40 cm 前後で丸い。

竪穴住居 S B 2738 は 3.2 m × 2.8 m の小規模なものである。カマドとしての焼土面の高まりは検出されなかったが、北壁に接して北へ延びる小溝 S D 2737 の埋土には焼土や炭が混入しており、S B 2738 のカマドの煙道と考えられる。柱穴は不明。竪穴住居及び煙道の埋土から土師器皿・小皿・台付皿・甕、山茶碗、須恵器鉢・壺等が出土した。おそらく S B 2738 は居住用としてではなく、掘立柱建物に付随する厨房的な施設であろう。

土壇には、径 1.5 m 前後、深さ 20 cm ～ 40 cm の円形を呈するもの (S K 2739、S K 2741、S K 2743、S K 2750) と、1.8 m × 6.0 m の長方形を呈するもの (S K 2748) がある。後者のような土壇は篠林地区で実施した第 33 次調査でいくつか見つかっており、性格は不明だが同類のものと思われる。S K 2748 は土壇の南端部にさらに方形の小土壇 S K 2751 を伴う。いずれの土壇も土師器皿・小皿・台付皿・甕、山茶碗、小皿等を出土した。

方形周溝遺構 S X 2734 は東西 6.0 m、南北 6.8 m、幅 40 cm、深さ 30 cm ～ 54 cm のほぼ垂直に掘られた方形に巡る溝で、周溝埋土内から多量の土師器皿、小皿が出土。特に南辺と東辺の出土量が多い。東辺の埋土上部ではこぶし大の礫の混入が認められた。

溝には、S D 2737 のほかに S D 2721、S D 2722、S D 2744、S D 2747、S D 2749 がある。

(Ⅳ) 鎌倉時代の遺構

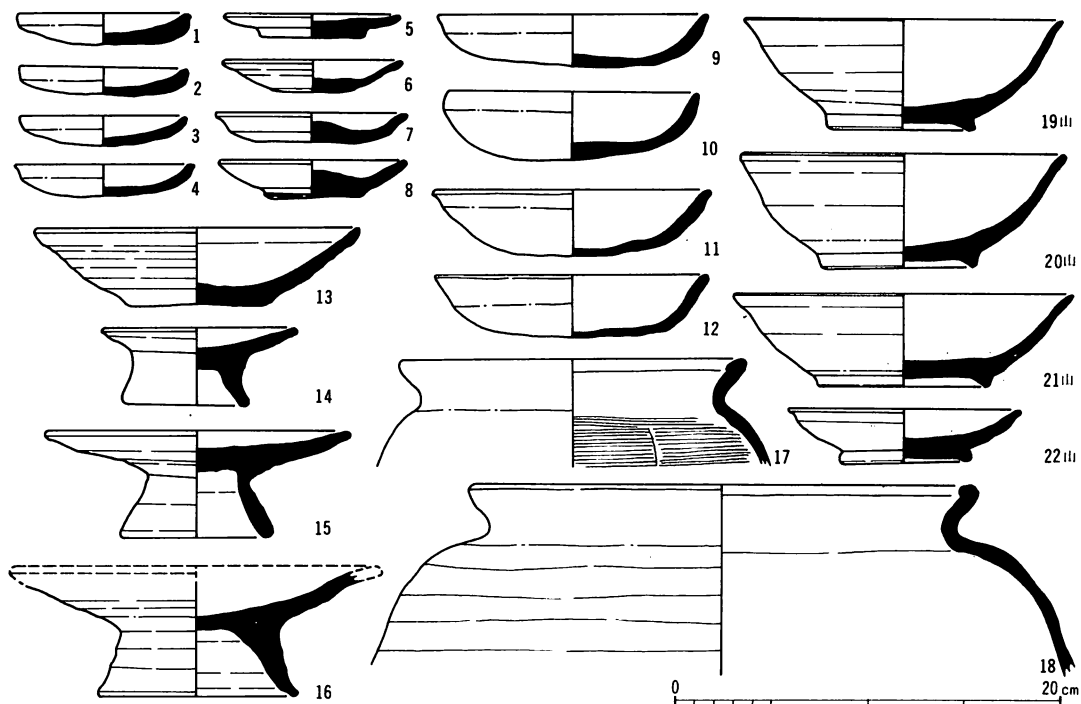
掘立柱建物 1、溝 8、土壇 7、井戸 1 がある。

掘立柱建物 S B 2732 は (3) 間 × 3 間の総柱建物で調査区外へ延びる。柱掘形は 40 cm 前後で柱掘形内に扁平な河原石を入れ礎石代わりとしている。石は柱掘形の底に接するものや、底から 10 数 cm 浮くものがある。

溝は南北に並走する S D 32 と S D 2723、調査区北部を東西に走る S D 2724、同じく調査区南部を東西に走る S D 2753、S D 2754、S D 2755 がある。いずれもほぼ東西軸、南北軸線上にのっている。溝幅は 80 cm 前後、深さ 30 cm 前後のものが多く、S D 2755 は溝幅約 2.0 m、深さ 80 cm を測り、主要な溝の一つと考えられる。S D 2754 は、この S D 2755 を掘り直した溝であることが切り合い関係より確認された。S D 32 は北で東へ折れ、S D 2725 に接続して約 6 m 延びて終わる。S D 2724 と S D 2753 とは心々距離で約 44.5 m、S D 2724 と S D 2754 とでは約 46 m の間



第8図 第45次出土遺物 S D33、1～16 S X2735、17～22



第9図 第45次出土遺物 S K 2750

隔がある。

土壇には径が2.0 m前後のもの（S K 2728、S K 2730、S K 2731）と1.0 m前後のもの（S K 2733、S K 2736、S K 2740、S K 2759）があり、円形ないしは楕円形を呈する。深さは20cm～40cmである。土壇内出土遺物は器壁の薄い土師器皿・小皿が中心で、これに少量の山茶碗、小皿が伴う。

井戸S E 2752は径1.4 mの素掘り井戸で、埋土に多量の小礫を含んでいた。完掘はできなかったが概して山茶碗の出土量が多い。

（V）遺物

出土遺物は遺構と同様、奈良時代と平安時代末葉～鎌倉時代のものが大半を占めている。このうち比較的良好な土器の一括資料としては、溝S D 33出土の一群、土壇S K 2750出土の一群、土壇S K 2759出土の一群がある。S D 33出土土器は奈良時代中頃に、S K 2750出土土器は平安時代末葉に、S K 2759出土土器は鎌倉時代に比定できよう。

このほか明確に遺構を検出できなかったが、土壇S K 2757の南へ約2 mの地点で、黒色土包含層よりS K 2759出土のものと同時期と考えられる土師器皿類が多量に出土。径14cm前後の皿55個体、径8 cm前後の小皿28個体、台付小皿1個体、山茶碗2個体が確認された。皿類はほとんど完形で鎌倉時代の土器溜と考えられる。

緑釉陶器は29点出土。大部分が椀、皿類の破片であるが、1点だけ香炉の底部片がある。

青磁は6点、白磁は4点出土。いずれも12世紀～13世紀のものと考えられる。

墨書土器は5点出土。すべて山茶碗の底部外面や体部の一部に記号のようなものを記したものである。

特殊なものに山茶碗の底部を加工し、硯として利用した転用硯や、斎宮では出土例の稀な平瓦が3点出土。うち1点は忍冬唐草文を施した軒平瓦である。

(Ⅵ) まとめ

調査の結果、当初の予想通り本地区における遺構は奈良時代と平安時代末葉～鎌倉時代のものが中心で、平安時代前半～中葉の遺構は皆無であった。こうした状況は本地区より西方約340 mで行なった第33次調査の結果と似ており、宮域北辺部に共通する一連の遺構状況を示しているものと考えられ、宮域中・東部に集中する平安時代前半～中葉の建物は当地区を含めた宮域北辺部までは及んでいないものと思われる。

一方平安時代末葉～鎌倉時代では、検出された遺構状況から判断してちょうど小区画の境目あたりにあたったため、建物の数は多くなかったが、ほぼ方位にのる掘立柱建物とこれを取り囲む溝や、山茶碗の転用硯、墨書土器等の発見から、終焉近い斎宮寮の一端を窺うことができよう。

V 第 46 次 調 査

6 AGN-C・D（鍛冶山地区）

斎宮跡東部の中町地区の中で昭和54年度から特に集中して実施してきたトレンチ調査のうち昭和56年度のトレンチ調査で比較的多くの掘立柱建物等を検出したところを面的に再確認することを目的として設定した調査区である。前出の第44次調査区から東へ約 150m をへだて、周囲のこれまでの調査には昭和56年度のほか54年度にも現在の道路をはさんで北約20mの地点で東西方向のトレンチ調査を実施しているが、この調査では顕著な遺構を確認することはできなかった。そのほか個人住宅建設に伴う事前調査として西側隣接地で第21-1次、東約50mで第25-5次調査を実施している。とくに第21-1次調査区は小規模なトレンチ調査のため掘立柱建物等は確認できなかったが、多量の土器を出土する土壇が検出されている。このため当地区は斎宮跡における重要な一画であることが予想されるところであった。

斎宮跡における方格地割のうち東から2条、北から3条目の区画の中央北辺付近に位置している当調査区では、この区画の北門を検出できる期待が持たれた。しかし東西方向の道路跡及びその南側々溝を検出したものの、門等の施設を確認することはできなかった。当調査区では調査前の予想とは異なるが総柱の掘立柱建物が検出されるなど、多くの貴重な成果を得ることができた。

（I）奈良時代末～平安時代初頭の遺構

斎宮跡のこれまでの調査では奈良時代から鎌倉時代にわたる各時期の遺構が複雑に錯綜して検出される場合が多かった。しかし今回の調査区では若干の遺構を除いて大半がこの時期のものであると思われる。

掘立柱建物は昭和56年度のトレンチ調査によって所在の確認されている4棟を含め10棟（SB 2390、S B 2391、S B 2392、S B 2780、S B 2785、S B 2790、S B 2795、S B 2796、S B 2805、S B 2810）を検出した。このうちS B 2780及びS B 2810の2棟のみが1辺1mを超える大型の柱穴をもつ建物で、両者とも総柱の建物である。またこれらの建物の大半の柱穴で、S B 2780が径45cm前後、S B 2810が径30cm前後の柱痕跡を検出した。このような倉庫と考えられる総柱の大型建物は斎宮跡の中心部とされる方格地割の地域では初めての検出例であり当地区の斎宮寮における性格を示唆する遺構であろう。S B 2785は他の建物がいずれも調査区辺に接して検出されているのに比べ北に偏し、道路跡の南側々溝に接して検出された。規模のうえでも2間×2間の小規模な建物で、他に比べ特異なものである。S B 2796は1辺50cm前後とさしたる規模ではないが、整然とした掘形をもつ柱穴で、その規模に比して2.70mと広い柱間の建物であ

る。さらに南の調査区外に続くためその全容は不明である。その他S B 2795・S B 2805・S B 2390～S B 2392の5棟と時期不明としたS B 2389の計6棟は推定を含めいずれも3間×2間と齋宮跡では建物・柱穴とも通有の規模を示す東西棟の建物である。このうちS B 2805とS B 2389は桁行、梁行ともその数値がほぼ一致するうえ、桁行方向の柱列をそろえ、両者の間隔も建物の桁行に等しい6.0mをへだてている。さらにS B 2389の南に並立するS B 2390はS B 2389に比べ梁行がやや広いものの、東西の妻柱列をそろえ、1.9mの間隔をへだてて配されている。以上のことからこれらの3棟は何らかの計画性をもって配置された建物群であろう。

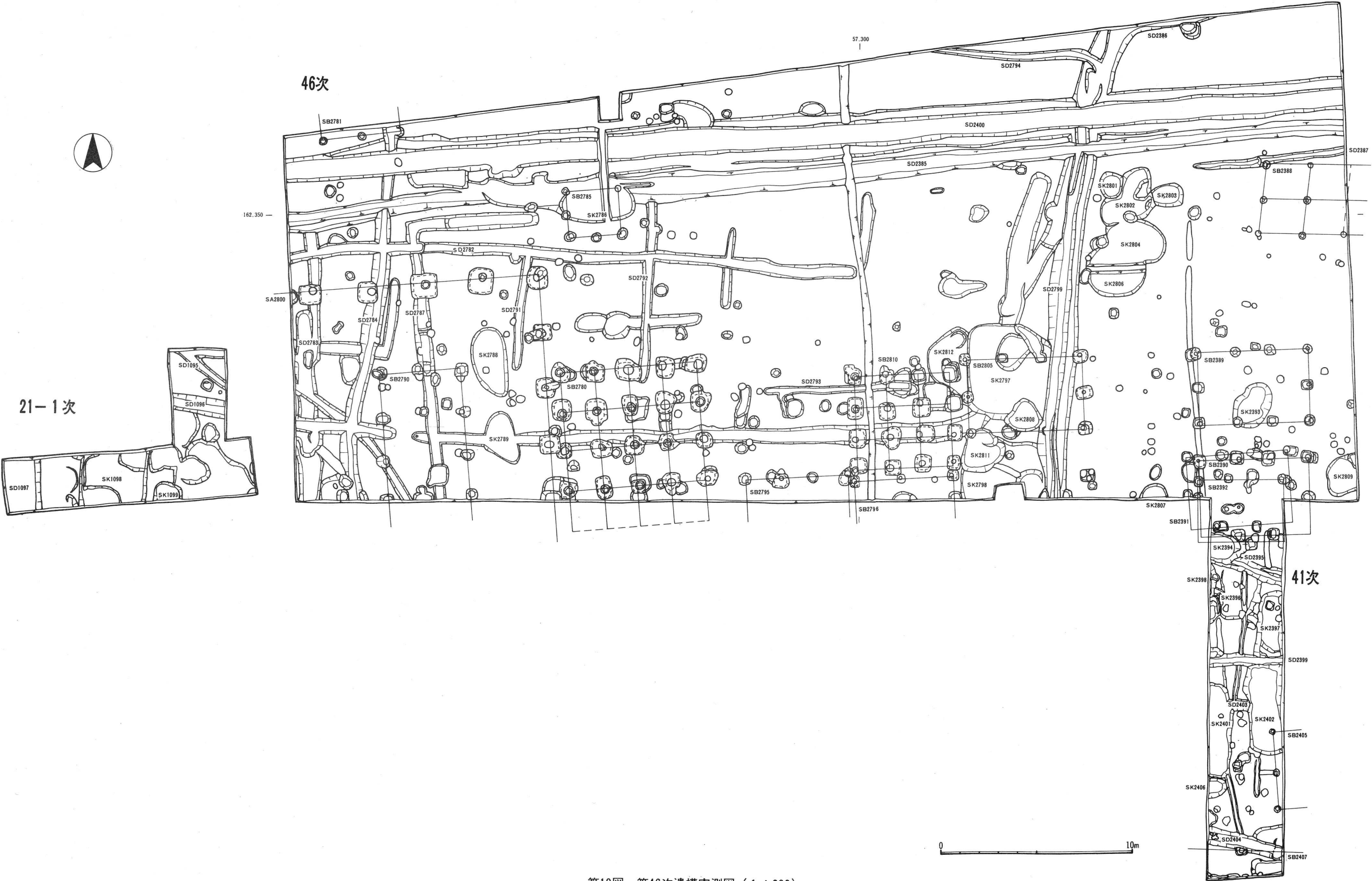
柵(S A 2800)は調査区西半部で検出した。いずれも1辺1.1～1.4mの大型柱穴で、西の調査区外から東へ4間、さらに南へ屈折して4間を経て南の調査区外に続く。しかしながら齋宮跡の方格地割のうち当調査区の西に位置する南北方向の溝又は道路跡の東側々溝は第21～1次調査区で検出されたS D 1097がこれに相当するものと考えられる。とすればS D 1097の東端からS A 2800の東端までの距離はわずか27mにすぎない。さらにS A 2800に囲まれる調査区南西部に検出された建物は不整形な柱穴をもつ南北棟のS B 2790のみである。S B 2790はS A 2800から南へ4.6m、西へ4.5mとほぼ同一距離をへだて、棟方向も一致することから同時期のものと考えられる。S A 2800の各柱穴の規模に比べこれらの点が現状の疑問点として残される。

溝は8条(S D 1096、S D 2400、S D 2783、S D 2783、S D 2784、S D 2787、S D 2792、S D 2793)を検出した。S D 2400を除いていずれも小規模な溝であるが、南北方向はほとんど調査区西端部に集中している。S D 2400は昭和56年度のトレンチ調査ですでに確認されており、調査区北辺に位置する道路跡の南側々溝に相当するものである。溝上部は攪乱溝等によって乱れているが、底部は幅1.2mで平坦になされた整然とした掘り方の溝である。またS D 2400の北側で調査区に含まれるのは広くとも幅4mほどであるが道路であったことを証するようにほとんど遺構もなく、平坦面を形成している。

土壇はトレンチ調査で確認されたものを含め12ヶ所(S K 2393、S K 2786、S K 2797、S K 2798、S K 2801、S K 2802、S K 2803、S K 2804、S K 2806、S K 2808、S K 2811、S K 2812)がある。規模・形状とも様々であり、総柱の掘立柱建物S B 2810の東に集中する土壇を除いて遺物の出土量は少ない。S K 2797、S K 2808、S K 2811、S K 2812は複雑に重複し、比較的多くの遺物出土量があり土師器の杯・皿等が多いが、量・内容とも第44次調査区における土壇群のような極端な特徴はうかがえない。

(II) 平安時代中葉の遺構

この時期の遺構は非常に少なく、わずかに調査区南東隅で検出した土壇1ヶ所(S K 2809)のみである。一部東の調査区外に続くが、径約2.0mの不整な円形を呈する浅い土壇である。遺物の出土量もあまり多くない。



第10図 第46次遺構実測図 (1 : 200)

そのほか昭和56年度のトレンチ調査では今次調査区南端から約4 mのところでトレンチ西壁に沿ってわずかに検出された土坑1ヶ所（S K 2398）と、幅約0.7 mの東西溝S D 2395がこの時期の遺構として知られている。

（Ⅲ）鎌倉時代の遺構

掘立柱建物1棟（S B 2388）と溝1条（S D 2799）がある。すでにトレンチ調査時に確認されている建物で、梁行2間で東の調査区外に続く床束をもつ建物である。柱穴は小さく、位置も不ぞろいであるが、周囲の柱穴の規模、深さ等から建物と考えられる。

溝は調査区東半部を南北に貫くS D 2799を検出した。幅1.6 m前後の比較的深い溝で、S D 2400を横断して北に続く。調査区北端ではS D 2799から分岐するようなかたちで東へS D 2386が、西へS D 2794が続くが相関々係は不明である。

（Ⅳ）時期不明の遺構

今回の調査区の中でも遺物の出土がない場合やわずかの細片が出土したのみで時期を判断し難い遺構が散見される。中でも掘立柱建物で時期不明のものにS B 2781がある。梁行2間で北の調査区外に続く南北棟であるが、その位置は道路跡の南側の側溝に相当するS D 2400をこえて北側である。これまでの斎宮跡発掘調査の成果及び前出の第44次鍛冶山地区の調査結果から斎宮跡東部の中町地区の方格地割はおそらく奈良時代末～平安時代初頭から平安時代中葉のものと考えられる。このためS B 2781は平安時代後半以降の建物であるとするのが妥当であると思われる。

一方S D 2385はトレンチ調査において鎌倉時代の溝としたものであるが、今回の面的な広がりをもった調査によって埋土の状況等から近世以降と思われる攪乱に類する溝であると判断した。

（Ⅴ）遺物

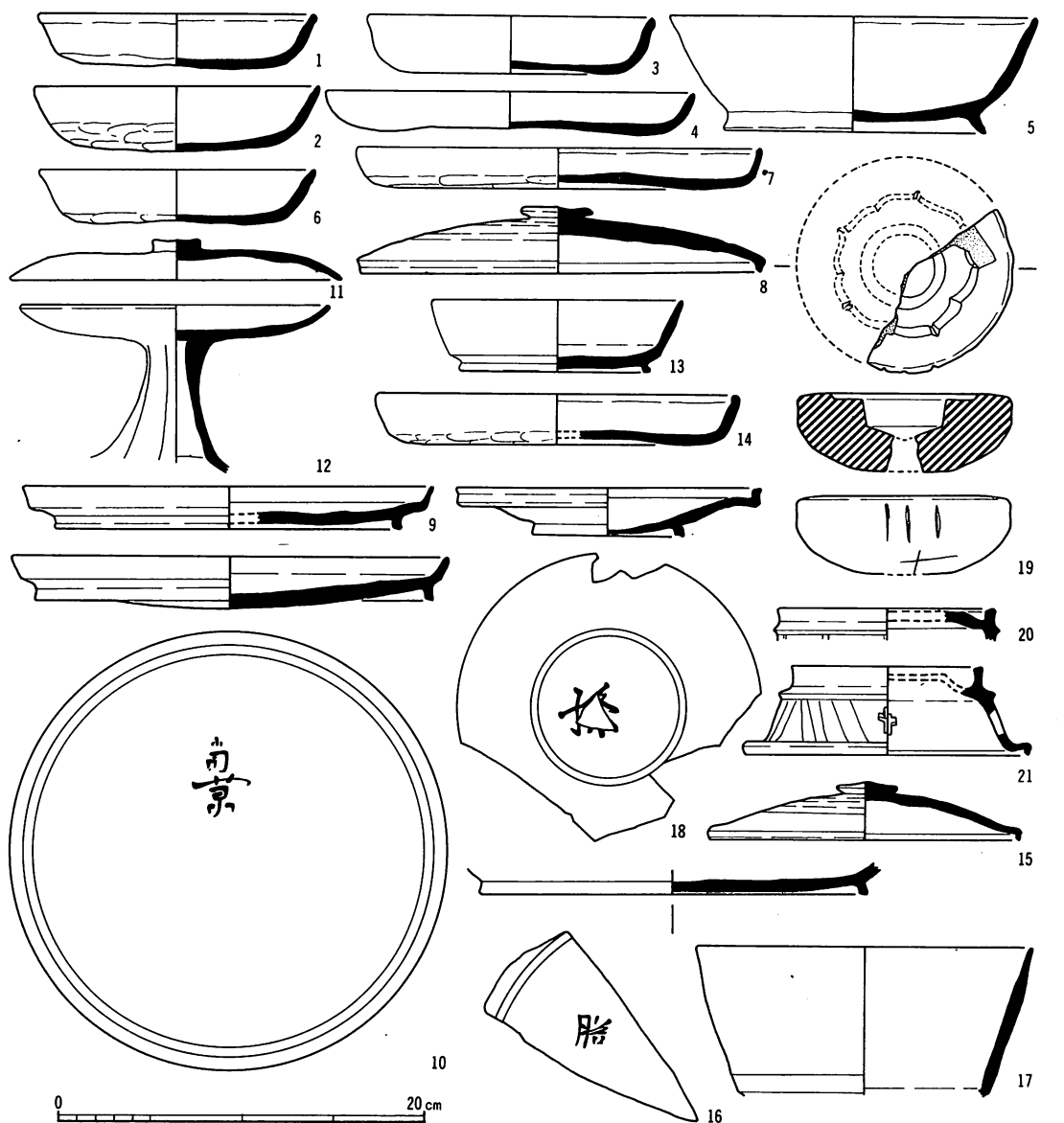
今回の調査区は長期にわたる各時期の遺構が重複することもなく、道路跡に沿った調査区を設定したためか全体に遺物出土量は少ない。またその大半がS K 2797及びその周辺に集中する奈良時代末～平安時代初頭の土坑から出土した遺物である。

当地区の特殊な出土遺物では円面硯、墨書土器、土製品等がある。

円面硯は硯面の径が約10～12 cmの破片2点でいずれも包含層中から出土したものである。1点は脚台部に十字の透しを推定4ヶ所施している。

墨書土器は3点出土し、いずれも須恵器の盤及び皿の底部に書かれたものである。このうち2点は文字部分が壊れていたり、遺存状態が悪く判読し難いが、この1点は「膳」と判読できる。

さらに土製品は径約6 cmの扁平な半球形を呈する。外面は粗雑な作りで遺存状態によるとこ



第11図 第46次出土遺物

S K 2797、1～5 S K 2808、6～8 S K 2811、9～10
 S K 2812、11～14 S K 2798、15～17 S K 2400、18
 包含層、19～21

ろもあろうが凹凸が多い。平坦面中央には推定径約4 cm、深さ約1 cmの円形の窪みがあり、周囲に花文を刻す。側面には3条のへう描き線を1ヶ所に施している。二次的な焼成を受けていると思われるところから金具等の鋳型ではないと思われる。

(Ⅵ) まとめ

今回の発掘調査によって明らかとなった当鍛冶山地区の一面における特色は柵と総柱の大型掘立柱建物の所在及び掘立柱建物と道路との関連である。当地区で明らかとなった掘立柱建物の大半が調査区南辺に沿い、道路跡の側溝から10 m 前後の距離をへだてている。このような傾

向はこれまでの調査でもうかがわえ、方格地割に相当する溝等の周辺では同時期の明確な遺構、特に掘立柱建物は検出されることが少なく、今回これを面的に示されたものである。

また掘立柱建物群の南への広がりや調査区の制約から明らかではないが、西から大型の柵とこれにとり囲まれた重要な建物又は「区画」、総柱の大型掘立柱建物すなわち立派な倉庫、規則的に配された東西棟の掘立柱建物群の三者が明瞭に区別して検出された。昭和54年度に実施した第24次調査区では主殿・後殿・脇殿が左右対称に配されていると思われる建物群を検出しているが、今回これとは異なった建物配置形態を示す官衙の一画が明らかとなったものである。倉庫を主要な建物として包括する当調査区周辺の一画が齋宮寮の13司における1司への比定にとって極めて重要な成果といえよう。

一方齋宮跡出土の文字資料は遺跡の立地条件から木簡等の出土は見られないものの、墨書土器を中心として若干ながら増加しつつある。中でも第37-4次調査区で出土した「水司鴨□」のへう描き土器は文献資料に直結する出土品として衆目を集めたところである。しかしながら出土地は方格地割から北にはずれたところに位置し、資料に匹敵する遺構が存しなかったためか水司に比定するには至らなかった。

これに対し今回の調査で出土した3点の墨書土器のうち「膳」は齋宮寮における13司のうち「膳部」=かしわべに相当する文字である。わずか1点のみの出土であり、他に傍証とすべき出土遺物は認められないが、前述の遺構の状況を考えあわせ一層その可能性が大であると思われる。今後の周辺における調査成果をまちたい。

VI 第 47 次 調 査

(トレンチ調査)

昭和57年度中に実施する保存管理計画の見直しに対応するため、計画調査、トレンチ調査とも、過去3ヶ年、特にC地区(準公有化地区)に対し、重点的に力を注ぎこんできた。本年度もこれを継続し東部C地区(中町地区)で2ヶ所のトレンチ調査を実施した。またAB地区(公有化地区)の中で、斎王の森と近鉄線との間に広がる水田部分の遺構状況については、これまで未確認であったため、4ヶ所のトレンチを設定するとともに、AB地区の畑地でも区画溝の確認を主たる目的として2ヶ所のトレンチ調査を行なった。トレンチ幅は4mを基本とし、総延長417m、調査面積1,653㎡にも及んだ。

(I) 6AFG-P・Q

第41次調査(6AFG-F地区)のすぐ南側に東西に設定したトレンチである。今回のトレンチ調査では、これより約75m北で東西に設定した第35次トレンチ調査(6AFE-N地区)で検出の南北溝SD1900・SD1902の延長部分の確認を目的とした。

【遺構】当初の予想通りSD1900、SD1902のいずれかに付くものと予想される溝SD2821、SD2822を検出した。両者は埋土の切り合い関係によりSD2821が新しいが、時期はいずれも鎌倉時代である。SD2821は幅1.4m、深さ70cm、SD2822は幅1.3m、深さ80cmを測る。

このほか平安時代初頭の土壇SK2820がある。東半分がSD2821により切られているが、径2.7m×2.0m、深さ40cmの楕円形を呈する。

柱穴はトレンチの中央部でいくつか見つかったが、いずれも小さなもので建物としては、まとまらなかった。

【遺物】出土遺物は大半が土壇SK2820出土のもので土師器杯・皿・甕・高杯・鍋、須恵器杯・蓋・盤・甕、土錘、鉄製刀子がある。時期的には、土壇SK1445出土の一群とほぼ同時期と思われる、平安時代初頭に比定できよう。なお、SK2820出土土器の組成において須恵器の占める割合が、同時期と考えられる他の土壇出土土器の一群と比べ、若干大きいことが注目される。

(II) 6AFK-K

西加座地区で行なった第34次調査では、平安時代前半、中葉の大型柱掘形をもつ掘立柱建物が多数見つかったほか、これらの建物群を区画すると考えられる溝SD1856、SD1857も確認されている。今回のトレンチはこの溝の東側延長部分を確認する目的で設定した。

【遺構】調査の結果溝SD1856の延長部分は確認されなかったが、SD1857は、これの延長部分及びこれとT字形に直交する南北溝SD2836を新たに確認した。時期は平安時代初頭若し

くは若干異なる可能性がある。

土坑は大小合わせて12ヶ所検出した。このうちSK2824、SK2834が奈良時代、SK2833が平安時代前半に属するが、他はすべて平安時代初頭のものである。特に一辺2.6m、深さ30cm前後の隅丸方形土坑SK2828からは、SK1445出土土器とほぼ同時期と考えられる多量の土師器杯・皿類が出土した。

調査区中央部における土坑の新旧関係は、埋土の切り合いにより、SK2830→SK2828→S



第12図 第47次発掘調査区位置図（1：3000）

K 2827、S K 2828→S K 2825の順序を確認した。またこれら平安時代初頭と思われる土壇は溝 S D 1857の埋土を切っており、S D 1857が先行することが認められた。

掘立柱建物は、その柱掘形がいくつか見つかっているが建物としてまとまらなかった。

〔遺物〕出土遺物の大半が土壇から出土した平安時代初頭のもので、他の時期のものは非常に少ない。土器では土師器杯・皿類が大部分を占め、須恵器の割合は1割にも満たない。

緑釉陶器は遺物包含層から1点のみ出土した。



第13図 第47次発掘調査区位置図（1：3000）

墨書土器は3点出土しており、2点はS K 2828出土の土師器碗底部外面に「×」印の記号を書いたものである。

(Ⅲ) 6 A E K-X・Z・2 A・2 B

斎宮跡調査事務所の西側の畑地に設定した東西トレンチで、南北溝の走ることが予想される地点である。

〔遺 構〕平安時代初頭の溝S D 2841、平安時代末葉の土壇S K 2837、鎌倉時代の溝3条(S D 2338～S D 2840)を確認し得たのみである。

溝S D 2841は幅70cm～90cm、深さ12cmを測る。この溝は柳原地区で行なった第28次調査で確認の溝S D 1328に続くものと予想される。

溝S D 2838～S D 2840は、幅4.0m、深さ12cmの浅い溝が、底部で3条に分かれたものである。

〔遺 物〕遺構が希薄で、遺構の検出される地山面まで表土下10cmと浅かったため、出土遺物は非常に少なかった。

(Ⅳ) 6 A E P-H

平安時代の掘立柱建物が63棟も検出された第19次調査(御館地区)の道を隔てた南側の畑地に南北に設定したトレンチで、宮域東部の中町地区で検出された平安時代前半の区画溝SD2400の西側延長部分が想定される場所である。

〔遺 構〕調査区の南半分が土取りのため、遺構が攪乱をうけていたが、溝4、掘立柱建物2、竪穴住居1、土壇3、土器焼成壇1など、奈良時代から平安時代末葉に至る各時期の遺構を検出した。

竪穴住居S B 2850と土器焼成壇S F 2851が奈良時代、掘立柱建物S B 2849、土壇S K 2846、S K 2847が平安時代前半、掘立柱建物S B 2852が平安時代中葉、土壇S K 2848が平安時代後半、溝S D 2842、S D 2843が平安時代末葉のものと思われる。なお溝S D 2844とS D 2845は、S D 2845の方が新しいことを確認しているが、出土遺物がなかったため、いずれも時期は不明である。

竪穴住居S B 2850は一辺2.6mの小規模なもので、北壁にカマドを設けている。カマド付近で土師器杯・皿・甕・甑が出土した。

土器焼成壇S F 2851は平面形態が二等辺三角形をなすものと思われるが、先端部は、これより新しいS B 2850が切っている。底辺は1.4m、深さ10cm前後で、垂直に掘られた壁面や平坦な床面は、赤褐色に堅く焼けしまっていた。

今回検出した4条の溝は、幅0.5m～1.0m、深さ20cm～60cmの小規模なものであり、当初予想された一辺120mの区画を形成する溝に匹敵するほどのものではないことが確認された。

【遺物】表土から約20cmで遺構面に達し、調査区の約半分が土取りの影響を受けていたため、遺物の出土量は少ない。緑釉陶器は2点出土している。

(V) 6ADJ-D・G

斎王の森の南側に広がる水田部分に設定した約100mの南北トレンチである。

調査の結果、遺構面の残っている箇所は、北端部の約10mと南端部の約7mだけで、大部分が土取りにより、遺構が破壊されていることが判明した。また遺構面の残存個所でもわずかに数ヶ所で小穴を検出し得たのみである。そのため土取部分に対しては2mトレンチに切り替え、東側半分のみ調査した。土取り穴の埋土からは、奈良時代から鎌倉時代に至る遺物が比較的多く出土しており、多くの遺構が壊されたことを示唆しているものと思われる。

(VI) 6ADL-E・O

6ADJ-D・G区の南側に設定した約103mの南北トレンチである。このトレンチでは、古里地区から塚山地区の古道沿いに東へ延びる奈良時代の溝SD170の延長部が見つかる可能性があった。

【遺構】遺構の検出される地山面までの基本的な層序は、北側のE区では耕土→暗灰褐色土と続き表土より約40cmを測り、南側のO区では20cm前後の耕土を除くとすぐ地山に達した。遺構はE区、O区とも土取りによりかなり攪乱されていたが、E区で竪穴住居、掘立柱建物、溝、土壇等を検出した。O区では顕著な遺構を見出すことができず、遺構の空白地帯と考えられる。

竪穴住居SB2854は一辺2.7m、深さ20cm前後の方形を呈するもので、時期は奈良時代末葉頃と思われる。

掘立柱建物SB2855は、桁行3間以上、梁行2間の平安時代後半の東西棟建物である。建物の軸線が北に対し、東へ13°偏っており、こうした棟方向を示す建物は宮城西部に多い。

溝は、SD2857、SD2862が奈良時代、SD2858が平安時代後半、SD2859、SD2861が時期不明である。SD2862は幅80cm前後、深さ40cm前後で、この溝が古里から続くSD170の延長溝と考えられる。

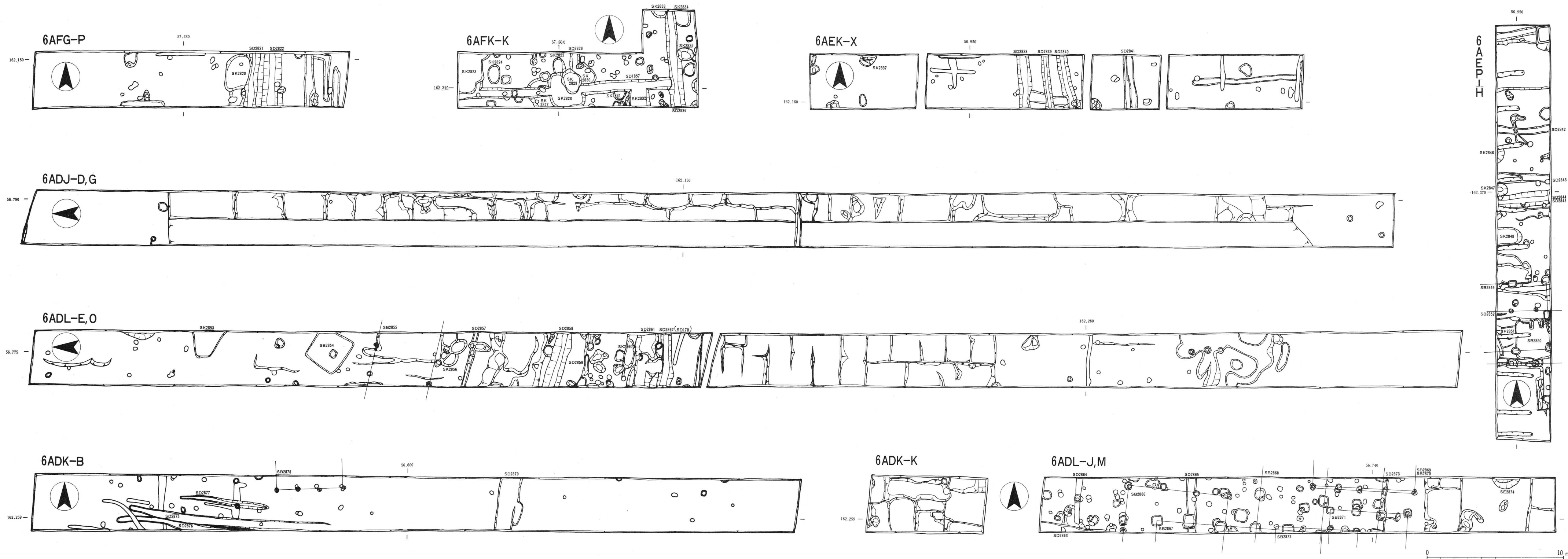
土壇はSK2856、SK2860が奈良時代、SK2853が鎌倉時代である。

【遺物】調査面積の割には検出遺構に乏しく、後世の攪乱の影響もあって出土遺物は少ない。緑釉陶器はE区で3点、O区で5点出土している。

(VII) 6ADK-K、6ADL-J・M

6ADL-E・O区トレンチから西へ畑一枚隔て、東西に設定したトレンチである。

遺構は表土下約20cmで検出され、6ADK-K区と6ADL-M区は土取りのため、ほとんど残存する遺構は認められなかったが、6ADL-J区では平安時代中葉の掘立柱建物をはじ



第14図 第47次遺構実測図 (1 : 200)

め、平安時代後半、末葉の遺構を数多く検出した。

〔遺 構〕 掘立柱建物は8棟確認されており、平安時代後半としたS B 2872を除く他の7棟すべてが平安時代中葉のものである。いずれも調査区外へ延びて建物の全容は不明であるが、桁行3間ないし4間の東西棟建物が基本となるようである。なお、大型の柱掘形をもつS B 2867は桁行4間ないし5間のいずれとも考えられる建物であるが、ここでは桁行5間の主要な建物の一つと考えた。またS B 2873は、西の側柱列のみ確認されているが、ここでは東側柱列は土取りにより消滅したものと考え南北棟建物として取りあげた。S B 2869とS B 2870は柱位置を北へ少し移動した建て替え関係と考えられる。掘立柱建物の棟方向はE 3° S ~ E 4° Sで宮域中・東部における建物と同じ棟方向を示している。

平安時代末葉の遺構には、溝S D 2863、S D 2865、井戸S E 2874がある。井戸S E 2874は推定径 2.0m前後の円形素掘り井戸で、南側の掘形の一部が検出された。埋土上部は小礫を多く含んでいた。

〔遺 物〕 掘立柱建物の柱掘方から出土した遺物が主体となるため、平安時代中葉の土師器杯・皿類の細片が多く、全体的に遺物の量は少ない。

緑釉陶器は、調査面積が小範囲であるにもかかわらず12点出土している。

(Ⅷ) 6 A D K - B

かつて上園地区で実施した第9-10次調査(Zトレンチ)の西側に東西に設定したトレンチである。

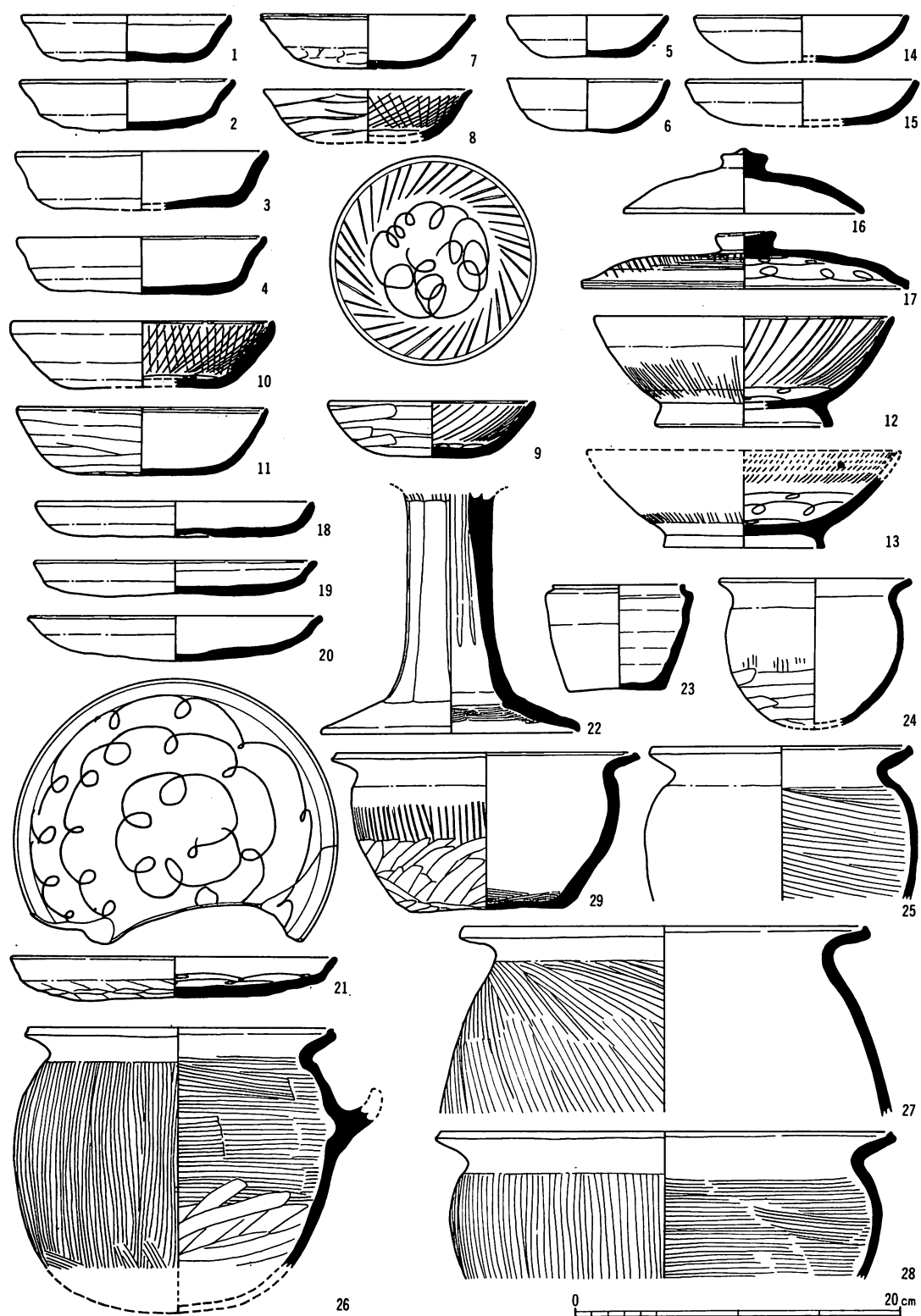
〔遺 構〕 遺構の検出される地山面は、調査区西部では表土下20cmと浅かったが、調査区西端から東へ約20mほど行ったあたりから、徐々に深くなっており、東部では耕土下に約40cmほどの黒褐色土が認められた。遺構は主として地山面の浅い調査区西部に集中しており、平安時代末葉の掘立柱建物S B 2878、S D 2876、鎌倉時代の溝S D 2875、S D 2877を検出したが、調査区中ほどから東部にかけては、奈良時代の溝S D 2879を検出し得たのみである。

〔遺 物〕 当トレンチでは、遺構が少なく、黒褐色土層からもほとんど遺物の出土をみなかったため、出土遺物の量としては非常に少なかった。緑釉陶器は細片が1点のみ出土した。

(Ⅸ) ま と め

今回のトレンチ調査の目的は先にも述べたように宮域中・東部における区画溝の確認と、牛葉集落北方の水田地帯の遺構状況を知ることであった。

区画溝の確認では、6 A F G - P・Q区トレンチ、6 A F K - K区トレンチ、6 A E K - X区トレンチで、ほぼ予想通りの位置で溝を確認することができた。特に6 A F K - K区トレンチの南北溝S D 2836は、南北道路の西側側溝にあたる可能性がある。一方、6 A E P - H区トレンチでは平安時代前半の主要な区画溝の一つであるS D 2400の西側延長部分が検出されるは



第15図 第47次出土遺物 S K2828

ずであったが、数条の小溝が検出されたにすぎなかった。これにより、広域圏道路の事前調査で確認された南北方向の区画溝を境にして、東側と西側とでは、区画溝のあり方に差異があるのではないかと考えられる。

次に水田地帯の遺構状況についてであるが、近鉄線から斎王の森に通ずる道路沿いの田畑については、大半が土取りにより遺構が残っていないことが確認された。しかしやや奥まった田畑、たとえば6ADL-J区トレンチでは平安時代の掘立柱建物が多数検出されており、「水田地帯は近年の土取りで遺構は全くない」という言い伝えは否定されたことになり、確実に水田地帯にも遺構が存在していたという確証を得るとともに、今後畑一筆ごとの遺構状況の確認の必要性を感じる。

Ⅶ 第 43 次 調 査

(個人住宅新築等の現状変更緊急調査)

第43－1次調査 6ADC－C (永田宅地)

宮域北部の坂本集落に近い宅地で、幅約6mのトレンチをL字形に設定して調査した。検出した遺構は溝6条と、土壇で、時期の明らかな溝はSD2890が奈良時代、SD2894が平安時代前半、SD2892が平安時代末で、他は時期不明である。SK2869は、鎌倉時代のものである。出土遺物の大半は包含層から検出した奈良時代の各種土師器であるが、少量出土した須恵器のうち底部内面に『美濃』の刻印のある高台の付く杯が1点出土した。

第43－2次調査 6ADT－B (山本倉庫)

牛葉集落南の宅地に幅5m、長さ7mの調査区を設定して調査した。検出した遺構はいくつかの小穴の外、南北方向に走る巾約2.8m、深さ30cm～70cmの溝で、埋土中から各種土師器のほか灰釉陶器碗、甕、須恵器杯、皿にまじって緑釉陶器碗片4点も出土した。なお包含層から緑釉陶器碗片3点がみつまっている。

第43－3次調査 6ACP－T (辻宅地)

竹川集落南側の宅地で東西方向の小トレンチを設定し、27㎡調査した。調査地区がせまいうえ北半部が大きく攪乱されており明瞭ではないが、奈良時代竪穴住居跡2棟、土壇2を検出した。

第43－4次調査 6ADS－D (西山宅地)

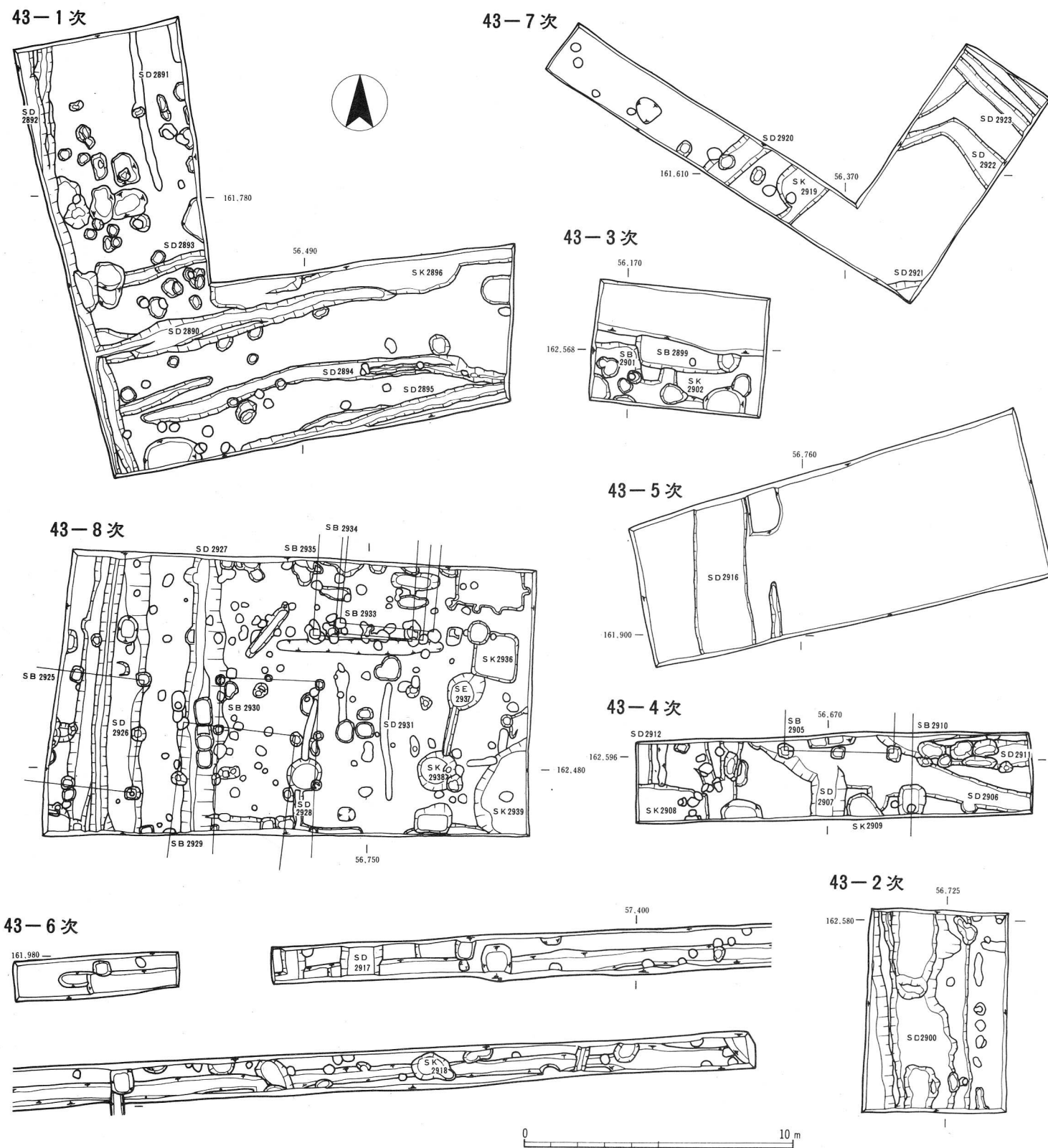
牛葉集落南側の宅地で幅3m、長さ14.5mの東西トレンチを設定して調査を実施した。検出した遺構は掘立柱建物2棟、土壇2、溝3条等である。奈良時代の遺構はSK2908のみである。SB2910は平安時代前半、SB2905は平安時代中葉と思われる。SD2906、SD2907は平安時代中葉の溝である。

第43－5次調査 6ADE－D (澄野宅地)

指定地中央北辺の斎王集落内の宅地で東西15m、南北6mの調査区を設定して調査した。検出した遺構は、幅2m、深さ約15cmの底部の平坦な溝1条で、出土遺物はなく、時期は不明である。

第43－6次調査 6AGE (町道側溝)

史跡指定地東部北限にあたる町道側溝新設にあたって、掘削される部分幅1.5m、長さ56mのトレンチを設定して調査した。調査区が狭小なうえ溝等によって攪乱を受けているため遺構は



第16図 第43次遺構実測図 (1 : 200)

十分明確でないが、溝や穴が数ヶ所検出されたにとどまる。

第43－7次調査 6 A B D－F（今西倉庫）

坂本集落南の宅地においてL字状のトレンチを設定し60㎡調査した。遺物包含層から若干の奈良時代土師器が検出されたが、発見した溝、土壇等からは明確な遺物は見つからず、時期は不明である。

第43－8次調査 6 A D Q－H（大西駐車場）

斎宮駅前宅地において175㎡調査した。検出した遺構は、掘立柱建物6棟、溝4条、井戸1基等である。掘立柱建物のうちS B 2925とS B 2929はほぼ柱通りが平行しており柱掘方も比較的大きい建物で平安時代前半に属する。このほか時期の明らかな建物は、小形の柱掘方をもつ南北棟のS B 2930は平安時代後半のものである。S D 2926とS D 2927は室町時代の溝で、S K 2938、S K 2936、S K 2939、S E 2937も同時期である。包含層中から緑釉陶器碗片が3点出土した。

Ⅷ 第1次環境整備事業

史跡齋宮跡のほぼ中央に位置する齋王の森は古くより地元の人々によって齋宮寮の跡として語りつがれてきた所である。文永9（1272）年、愷子内親王が退下されたあと齋宮寮は次第に荒廃してしまっただといわれる。僅か70年ばかり後の建武の頃には既に名ばかりの跡となっていたようである。しかし、齋王の森は元禄の文献や古地図にも記載されており、人々の記憶に永く留っていたと思われる。幕末以降の齋王制度復興の動きや、大正より昭和にかけての保存顕彰運動においても常にこの森が中心となり、地元の人々に親しまれてきた。この森は古くより旧齋宮村の所有地であったが、昭和24年、神宮に寄付されたものである。その後神宮はこの地に碑をたて管理し現在にいたっている。

一方、昭和45年の発掘調査以後、史跡指定され、現地に調査事務所が開設されるとともに、当史跡を訪れる見学者も次第に増え、最近では年間10,000人近くを数えるようになった。しかし、発掘調査を実施している期間を除いては見学出来るのは調査事務所の展示室だけという状況である。また、国史跡指定申請の際、指定後の環境整備計画が打ち出された経緯もあり、史跡整備の要望が強くなってきた。そこで、史跡指定後三ヶ年が過ぎた昭和57年度、これまで齋宮跡のシンボルゾーンとして、地元の人々に親しまれてきた齋王の森周辺で、県内外の見学者の利用と、地元の人々の憩いの場として活用出来るよう第一次環境整備事業を実施することになった。

（Ⅰ）基本構想

齋宮跡の整備計画については、まだ全体の構想が決定していない上、今年度は保存管理計画の見直しの年でもある。そこで、今年度の整備については、今後の整備にあまり影響を及ぼさないよう、出来るだけ現状を改変しないということに留意した。計画の基本的な考え方は、

- ①発掘調査によって明らかになった重要な遺構を復元的に表示する。
- ②これまでの齋王の森といったイメージを損なわないよう配慮する。
- ③見学者の憩いの場として活用出来るよう芝生広場、砂利広場、遊歩道などを設け、樹木を植栽する。

（Ⅱ）遺構復元

昭和57年6月及び10月に事前の発掘調査を齋王の森の東及び南部分で1450㎡に亘って実施した。調査の結果、掘立柱建物7棟、井戸4基、土壇、道路の側溝などを検出した。この中で、平安時代の掘立柱建物2棟、井戸1基、道路及び側溝を部分的に復元することにした。



第17図 史跡環境整備図 (1:500)

【掘立柱建物】 4 間× 2 間の東西棟と 3 間× 2 間の南北棟の 2 棟を復元した。東西棟は桁行 8.4 m で柱間 2.1 m、梁行 3.6 m で柱間 1.8 m とした。また、軒の出は妻側は 1 m、平側は 1.1 m とした。一方、南北棟は桁行 7.2 m、梁行 4.8 m、柱間は共に 2.4 m とし、軒の出は妻側は 1.1 m、平側は 1.3 m とした。いずれも検出した柱穴位置に約 40 cm レベルアップして、径 32 cm のヒノキ丸太を高さ 60 cm に設置した。ヒノキ丸太はやりガンナ風に仕上げ、C C A 加工による防腐処理を施した。基礎コンクリートに 10 cm 埋め込み、ステンレスアンカーボルトで固定した。身舎及び軒の出はレンガ縁石で標示し、それぞれ白黒の砂利を敷いた。

【井 戸】 検出した井戸は径 1.9 m の素掘りの井戸である。地山上面より約 40 cm 上に径 1.5 m、厚 7 cm の井桁組をしたヒノキ板による井戸枠を高さ 60 cm に設置した。井戸枠の方向は道路と同じ方向にした。掘立柱建物同様 C C A 加工を施し、基礎コンクリートにステンレスアンカーボルトにより固定した。井戸内部には砂利を敷き、周囲は幅 90 cm で洗場の雰囲気を出すため玉石張とした。

【道 路】 東西に走る道路の北側側溝は幅 3 m であり、南側側溝については南の肩の部分を検出している。道路面を現町道の高さに決め、南側側溝の幅を 3 m とすると、道路幅は 4 m となる。溝の法面勾配を一割五分とし、深さ 40 cm にしたため、溝底幅は 1.8 m となった。道路面は細かい砂利敷とし、法面の芝生との境にはレンガ縁石を施した。溝底には粗い碎石を敷いた。一方、南北道路は溝幅を 2 m とした他は全て東西道路と同じようにした。水田部分との境の溝の肩は溝底より 20 cm 高くしている。

【遺構標示石】 掘立柱建物跡、井戸跡、道路跡と刻字した標示石を各遺構部分に 5 基設置した。標示石は幅 50 cm、高さ 50 cm、厚さ 15 cm の黒御影石で、地表に 30 cm 露出させた。

（Ⅲ）その他の施設

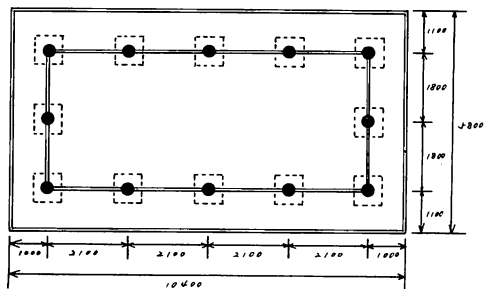
【遊歩道】 森内の散策と復元した遺構及び砂利広場などを回遊出来るよう幅 1.5 m の砂利敷の遊歩道を総延長約 250 m に亘って設けた。砂利道の両側は玉石縁石とした。東西に走る道路側溝部分には幅 1.8 m の木橋を設置した。木橋は、コンクリート橋脚に H 型鋼の橋桁をかけ、その上に C C A 加工した松材をわたしたものである。

【砂利広場、芝生広場】 見学者及び地元の人々が多目的に使用出来るよう北及び南側に砂利広場、芝生広場をつくった。これらは駐車場や各種催場に利用してもらえばという考えからである。また、砂利広場には町が案内板を設置している。この案内板には復元した遺構の当時の様子を想像して描いている。両広場の水田側部分には排水溝を設けた。

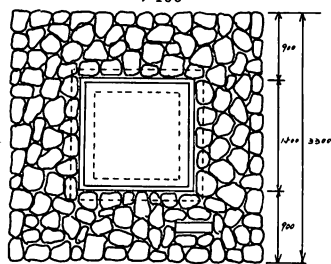
【照明灯】 防犯及び夜間の見学者のため照明灯を 2 基設けた。高さ 5 m で、灯具は灯籠型で、ブラウン色のものである。

【その他】 南北に走る道路の両端には車の進入を防ぐため車止を 5 基設けた。車止は径 15 cm、

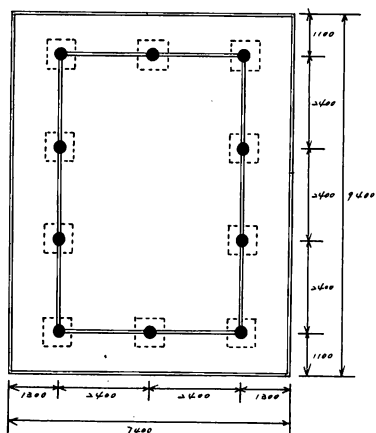
S B 2603 $\frac{1}{200}$



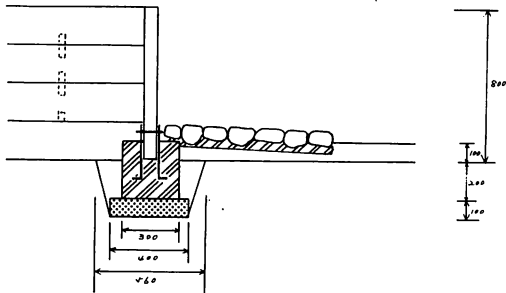
S E 2622 $\frac{1}{100}$



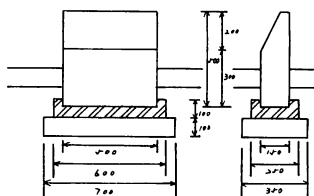
S B 2616 $\frac{1}{200}$



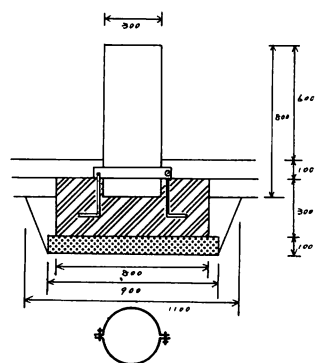
S E 2622 $\frac{1}{40}$



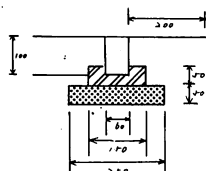
遺構標示石 $\frac{1}{40}$



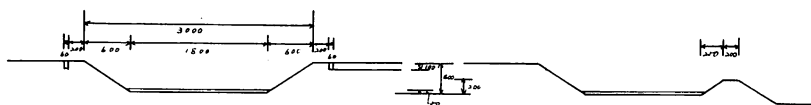
ヒノキ丸太 $\frac{1}{40}$



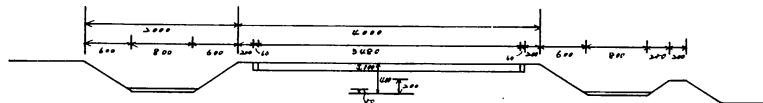
区画溝 $\frac{1}{20}$



古道 (東西) $\frac{1}{100}$



古道 (南北) $\frac{1}{100}$



第18図 復元遺構計測図

高さ60cmの擬木製である。また、森内に町が擬木製のベンチ2ヶ所、東隅に簡易トイレを設置している。

(VI) 植 栽

現在、神宮が管理している個所には椿、桜、杉、シロダモ、サンゴ樹など約10種、150本の樹が、またこの裏手にはヒノキが200本ばかりが植栽されていた。また、東北部の砂利広場にしたい個所には茶の木が一行植えられていた。このうち、ヒノキを約半数を伐木し、間隔をあけるとともに、別の樹木を植栽した。さらに芝生地区や復元した遺構の周辺にも樹木を植え、斎王の森の雰囲気を出すように心がけた。植栽する樹木については基本的に明和町の自然植生にあったものを選択した。今回植栽した樹木は次のとおりである。

○針葉樹

クロマツ、スギ

○常緑広葉樹（高木）

シイノキ、タブノキ、クスノキ、アラカシ、ヤマモモ、クロガネモチ、ツバキ、サザンカ、カクレミノ、ユズリハ、シロダモ、サカキ、ネズミモチ、カナメモチ

○常緑広葉樹（低木）

ヒイラギナンテン、アセビ、シャリンバイ、ヒラドツツジ、サツキ、キンメツグ

○落葉広葉樹（高木）

イチョウ、ウメ（白、紅）、シダレザクラ、ケヤキ、イロハモミジ、オオシマザクラ、シダレヤナギ、サトザクラ、エゴノキ、コナラ

○落葉広葉樹（低木）

ムラサキシキブ、ヤマブキ、ドウダンツツジ

IX 調査事務所要覧

I 調査概要

(1) 調査事業 14地区 7,140㎡

ア 計画発掘調査 6地区

第42次調査	楽殿地区	1,450㎡
第44次調査	鍛冶山西地区	1,200㎡
第45次調査	楽殿東地区	920㎡
第46次調査	鍛冶山東地区	1,260㎡
第47次調査	トレンチ調査	1,653㎡

イ 緊急発掘調査（個人住宅新築等）

第43－1次～8次調査	657㎡
-------------	------

(2) 史跡整備事業

ア 第1次史跡環境整備事業

施工内容 (ア) 遺構復元、掘立柱建物
2棟、井戸1基、測溝
及び道路等

(イ) その他 芝生広場、砂
利広場、遊歩道

施工期間 昭和58年1月17日～3月25日

施工場所 斎王の森周辺地区

施工面積 4,800㎡

(3) 普及事業

ア 現地説明会の開催

(ア) 第42－1次発掘調査現地説明会

日時 昭和57年6月20日 10時30分

場所 明和町斎宮字楽殿地内

調査面積 1,200㎡

調査期間 5月6日～7月7日

報告 谷本鋭次主任技師

参加人員 約260名

(イ) 第44次発掘調査現地説明会

日時 昭和57年9月5日 10時30分

場所 明和町斎宮字鍛冶山地内

調査面積 1,200㎡

調査期間 7月20日～10月13日

報告 吉水康夫技師

参加人員 約300名

(ウ) 第45次発掘調査現地説明会

日時 昭和57年11月3日 10時30分

場所 明和町斎宮字楽殿地内

調査面積 920㎡

調査期間 10月14日～12月4日

報告 倉田直純主事

参加人員 約180名

(エ) 第46次発掘調査現地説明会

日時 昭和58年2月6日 10時30分

場所 明和町斎宮字鍛冶山地内

調査面積 1,260㎡

調査期間 12月13日～2月26日

報告 吉水康夫技師

参加人員 約200名

イ 調査報告会

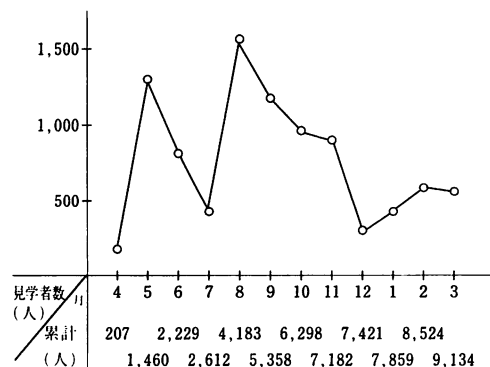
(ア) 5月3日 日本考古学協会第48回総
会 山沢義貴主査

(イ) 8月7日 歴史学研究会古代史サマ
ーセミナー倉田直純主事

(ウ) 10月23日 明和町議会斎宮跡特別対
策委員会 山沢義貴主査

(エ) 11月2日 三重県公立小中学校事務
研究会 佐々木宣明所長

ウ 資料展示室見学者数



エ その他

斎宮跡講演会

日時 昭和57年11月3日 午後1時30分

場所 明和町中央公民館講堂

演題 「斎宮—その喜びと悲しみ—」

講師 奈良大学助教授 水野正好

II 予 算

斎宮跡保存対策費 82,621千円

(単位：千円)

事業名	区 分	歳 出	財源内訳		備 考
			県 費	国 費	
発掘調査費		32,423	16,423	16,000	発掘面積 約6,500㎡
史跡公有化 補 助 金		36,000	36,000	—	公有化面積 約1.6ha
管 理 施 設 設 置 補 助		100	100	—	
保 存 啓 発 事 業		500	500	—	
維 持 管 理		3,598	3,598	—	
環 境 整 備		10,000	5,000	5,000	
計		82,621	61,621	21,000	

III 組織規定

三重県教育委員会事務局組織規則抜粋

(昭和43年4月1日
教育委員会規則 第6号)

最終改正 昭和54年3月31日

教育委員会規則第6号

第三章 出先機関の組織

(教育事務所及び斎宮跡調査事務所の設置等)

第12条 事務局の事務(県立学校関係事務を除く。)を分掌させるため、出先機関として教育事務所及び斎宮跡調査事務所を置く。

3. 斎宮跡調査事務所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
三重県斎宮跡調査事務所	多気郡明和町

(分掌事務)

第14条 3. 斎宮跡調査事務所においては次に掲げる事務をつかさどる。

一、斎宮跡の発掘並びに遺構及び出土品の調査研究に関すること。

二、斎宮跡に関する各種資料の収集調査及び研究並びに公開展示に関すること。

三、その他斎宮跡に関すること。

附則 (昭和54年3月21日、教育委員会規則第6号抄)

この規則は、昭和54年4月1日から施行する。

IV 職 員

職	氏 名	備 考
所 長	佐々木 宣 明	文化課主幹兼務
主 査	山 沢 義 貴	
主任技師	谷 本 鋭 次	
事務職員	倉 田 直 純	
技術職員	吉 水 康 夫	
事務補助員	岩 中 美絵子	
〃	田 丸 恵美子	
〃	森 本 敦 子	

V そ の 他

(1) 斎宮跡調査指導委員

○設置要綱

1. 設 置

国史跡斎宮跡の調査と保存のための整備にかかる事業の円滑な推進を期するため、三重県教育委員会事務局に斎宮跡調査指導委員(以下「委員」という。)を置く。

2. 所掌事務

委員は、国史跡斎宮跡の調査、保存のための整備について、三重県教育委員会教育長の求めに応じて次の事項を指導・助言する。

(1) 当史跡の遺構の調査、検討に関する

こと。

(2) 当史跡の遺物の調査、検討に関する
こと。

(3) 当史跡の文献の調査、検討に関する
こと。

(4) 当史跡の環境整備の計画、検討に関
すること。

(5) その他、当史跡の調査、保存のため
の必要事項に関すること。

3. 定数等

(1) 委員の定数は、10人以内とする。

(2) 委員は、考古学、歴史学、建築史学
などに関し専門的知識を有する者のう
ちから三重県教育委員会教育長が委嘱
する。

4. 任期

任務が完了するまでの間とする。

5. 会議

会議は、必要に応じ三重県教育委員会
教育長が招集する。

6. 庶務

会議の庶務は、三重県教育委員会事務
局文化課において処理する。

7. その他

この要綱に定めるもののほか、委員に
関し必要な事項は、三重県教育委員会教
育長が定める。

附則

この要項は、昭和54年10月19日から施
行する。

○調査指導委員

氏名	専攻	現職
福山敏男	建築史	(国)文化財保護審議会専門委員
坪井清足	考古学	奈良国立文化財研究所長
門脇禎二	古代史	京都府立大学教授
楢崎彰一	考古学 陶磁史	名古屋大学教授
服部貞蔵	考古学	(県)文化財保護審議会委員
久徳高文	国文学	嵯山女学園大学教授
渡辺 寛	古代史	皇学館大学助教授

○委員会の開催

1. 第1回調査指導委員会

日時 昭和57年5月18日

場所 三重県斎宮跡調査事務所

指導内容

昭和57年度事務事業の概要につ
て

斎宮跡発掘調査の概要について

斎宮跡保存管理計画の見直しにつ
いて

2. 第2回調査指導委員会

日時 昭和57年11月16日

場所 三重県斎宮跡調査事務所

指導内容

昭和57年度発掘調査の経過報告に
ついて

斎王の森周辺の環境整備事業につ
いて

斎宮跡保存管理計画の見直しにつ
いて

昭和57年度所内日誌

自 昭和57年 4 月 1 日
至 昭和58年 3 月31日

月 日	内 容
4 月11日	斎王の森南水田にどんと花移植
29日	参議院社会労働委員長視察
5 月 3 日	日本考古学協会第48回総会において発表（山沢主査）
6 日	第42－1 次発掘調査開始（楽殿地区）
7 日	明和町役場庁舎玄関に展示するため遺物貸出し
10日	第43－1 次発掘調査開始（個人住宅）
15日	斎宮跡保存啓発事業（京都葵祭視察……明和町各界代表）
17日	斎宮跡保存啓発事業（明和町公民館朗読講座にて講演……倉田主事）
18日	斎宮跡調査指導委員会……明和町中央公民館
19日	斎宮跡保存啓発事業（明和町公民館老人習字講座にて講演……吉水技師）
20日	斎宮跡保存啓発事業（明和町公民館音楽講座にて講演……山沢主査）
21日	第43－1 次発掘調査完了
21日	第43－2 次発掘調査開始（農業用倉庫）
21日	斎宮跡保存啓発事業（明和町公民館寿講座にて講演……谷本主任技師）
25日	斎宮跡保存啓発事業（明和町公民館洋裁B 講座にて講演……倉田主事）
26日	斎宮跡保存啓発事業（明和町公民館習字講座にて講演……山沢主事）
27日	明和町発シB 遺跡発掘調査指導（5 月27日～9 月5 日）
27日	斎宮跡保存啓発事業（明和町公民館民謡講座にて講演……谷本主任技師）
27日	斎宮跡保存顕彰三重県議員連盟視察……長岡京ほか
28日	中勢南部県民局地方連絡会議で調査報告（佐々木所長）
6 月 2 日	第43－3 次発掘調査開始（物置小屋）
9 日	第43－2 次発掘調査完了
11日	第43－3 次発掘調査完了
11日	第43－4 次発掘調査開始（個人住宅）
17日	斎宮跡保存啓発事業（明和町公民館寿読書講座にて講演……吉水技師）
18日	斎宮跡保存顕彰三重県議員連盟総会……県議会
20日	第42－1 次発掘調査 現地説明会（谷本主任技師説明）
22日	斎宮跡保存啓発事業（明和町公民館老人盆栽講座にて講演……山沢主査）
23日	斎宮跡保存啓発事業（明和町公民館老人短歌講座にて講演……倉田主事）
24日	斎宮跡保存啓発事業（明和町公民館老人俳句講座にて講演……吉水技師）
24日	第43－4 次発掘調査完了
26日	斎宮跡地権者の会（総会）……明和町中央公民館
7 月 7 日	第42－1 次発掘調査完了
8 日	文化庁記念物課主任調査官の斎宮跡現地視察
17日	観光資源保護財団主催 斎宮跡調査委員会……明和町役場
20日	第44次発掘調査開始（鍛冶山地区）
28日	第43－5 次発掘調査開始（個人住宅）

月 日	内 容
7月29日	三重県出納長の斎宮跡現地視察
8月2日	第43－5次発掘調査完了
5日	「県政バス教室」の見学（南勢志摩県民局管内から）
6日	斎宮跡地権者の会（管理計画小委員会）……明和町中央公民館
7日	歴史学研究会古代史サマーセミナーにおいて報告（倉田主事）
9日	三重県監査委員の斎宮跡調査事務所監査
19日	斎宮跡地権者の会（全体会議）……明和町農構センター
26日	三重県教育委員会へ「斎宮跡保存について」陳情（明和町長・明和町議会）
30日	三重県知事へ「斎宮跡保存について」陳情（明和町長・明和町議会）
9月3日	斎宮跡地権者の会（管理計画小委員会）……明和町中央公民館
5日	第44次発掘調査 現地説明会（吉水技師説明）
7日	史跡斎宮跡調査・保存県関係課会議……津吉田山会館
8日	斎宮跡保存顕彰三重県議員連盟西場事務局長の葬儀
13日	社団法人朝倉氏遺跡保存協会長の斎宮跡現地視察
28日	第42－2次発掘調査開始（楽殿地区）
29日	「斎宮跡保存管理計画」の見直しについて（県調査事務所・明和町・斎宮跡地権者の会の各代表者会議）
10月5日	三重県総務部長・地方課長の斎宮跡現地視察
6日	「斎宮跡保存管理計画」の見直しについて（文化庁主任調査官・県調査事務所・明和町の協議）
13日	第44次発掘調査完了
14日	第45次発掘調査開始（楽殿地区）
14日	観光資源保護財団主催 斎宮跡調査委員会……奈良国立文化財研究所
15日	第42－2次発掘調査完了
23日	明和町議会斎宮跡特別対策委員会で調査報告……山沢主査
25日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町中央公民館
28日	斎宮跡地権者の会（管理計画小委員会）……明和町中央公民館
11月2日	明和町文化展に遺物貸出し
3日	第45次発掘調査 現地説明会（倉田主事説明）
3日	斎宮跡保存啓発事業（斎宮跡講演会「斎宮－その喜びと悲しみ」講師奈良大学助教授水野正好）……明和町中央公民館
5日	第43－6次発掘調査開始（町道測溝）
11日	「文化財－その調査と保存について」三重県公立小中学校事務研究会で講演（佐々木所長）……津農協会館
11日	大規模遺跡調査五県会議……九州歴史資料館
13日	第43－6次発掘調査完了

月 日	内 容
11月16日	斎宮跡調査指導委員会……明和町中央公民館
19日	斎宮小学校玄関展示のため遺物貸出し
20日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町中央公民館
24日	第43－7次発掘調査開始（倉庫新築）
30日	第43－7次発掘調査完了
12月1日	調査事務所前庭に明和町坂本、今西宰吉氏がさざんかとさつきを寄贈
4日	第45次発掘調査完了
13日	第46次、第47次発掘調査開始
17日	三重県副知事の斎宮跡現地視察
22日	「斎宮跡保存管理計画」の見直しについて（文化庁・三重県・明和町の協議）……文化庁
1月6日	斎宮跡第1次史跡環境整備事業指名競争入札のための現地説明会
13日	観光資源保護財団主催 斎宮跡調査委員会……明和町役場
17日	斎宮跡第1次史跡環境整備事業開始（斎王の森周辺約 5,000㎡…施工、津市中村造園）
22日	第43－8次発掘調査開始（個人住宅）
22日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町中央公民館
27日	斎宮跡保存啓発事業、町民代表の集い（講師奈良文化財研究所長坪井清足・三重大学名誉教授服部貞蔵・皇学館大学助教授渡辺寛）
31日	斎宮跡地権者の会（管理計画小委員会）……明和町農構センター
2月6日	第46次発掘調査 現地説明会（吉水技師説明）
12日	第43－8次発掘調査完了
19日	斎宮跡中町対策委員会（役員会議）……中町公民館
19日	文化庁記念物課主任調査官の斎宮跡現地視察
20日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町役場
21日	第47次発掘調査完了
24日	斎宮跡保存顕彰三重県議員連盟総会……県議会
26日	第46次発掘調査完了
3月4日	作業員研修旅行……法隆寺・平城宮跡
8日	斎宮跡地権者の会（全体会議……文化庁仲野主任調査官出席）……明和町中央公民館
13日	「斎宮跡保存管理計画」の見直しについて（文化庁・三重県・明和町・明和町議会・斎宮跡地権者の会の五者会議）……明和町役場
18日	斎宮跡地権者の会（全体会議）……明和町中央公民館
22日	「斎宮跡保存管理計画」の見直しについて（文化庁・三重県・明和町の三者協議）……文化庁
24日	「斎宮跡保存管理計画」の見直しについて（文化庁次長・文化財保護部長・記念物課長と県教育長との協議）……文化庁
28日	史跡公園「斎宮跡」開園式（第1次史跡環境整備事業完成記念）
28日	第1回斎王まつり（斎宮婦人会主催）……史跡公園

掘立柱建物・柵列一覧表

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 間		

第42次調査（6 A E I - D）

2603	(4)×2	E 2°S	—	3.7	2.1	1.85	平安初	
2602	—×2	E 2°S	—	4.0	2.0	2.0	平安前	
2609	—×2	E 1°N	—	4.2	2.1	2.1	平安中	
2610	3×2	N 4°E	6.8	4.0	2.3	2.0	〃	
2616	3×2	N 4°E	6.9	4.5	2.3	2.25	〃	
2605	(4)×2	E 5°N	—	3.9	2.6	1.95	平安後	
2606	4×2	E 2°N	8.4	3.9	2.1	1.95	〃	

第44次調査（6 A F L - A・B・C・D）

2680	5×2	E 3°N	12.0	5.4	2.4	2.7	平安前	東面に廂、廂柱間2.95m S B 2690より古い
2690	(5)×2	N 3°W		4.8	2.4	2.4	〃	
2699	2×2	E 3°N	4.8	4.5	2.4	1.8 2.7	〃	
2700	5×—	N 5°W	10.5		2.1	2.4	〃	
2705	—×2	E 3°N		5.9		2.95	〃	
2685	5×—	E 3°N	12.0	—	2.4	2.7	平安中	
2691	5×2	E 10°N	9.5	3.8	1.9	1.9	〃	
2692	3×2	E 10°N	8.1	5.4	2.7	2.7	〃	
2653	3×2	N 2°W	6.3	4.2	2.1	2.1	平安後	
2654	3×2	E 6°N	7.2	4.2	2.4	2.1	平安末	
1421	3×—	E 0°	7.2	—	2.4	—	不 明	第29次トレンチ調査で確認
2681	3×—	N 5°W	6.3	—	2.1	2.1	〃	
1411		N 3°W			2.95			柵列
2655		N 4°W			2.95			〃
2675		N 4°W			2.95			〃 S A 1411より新しい

第45次調査（6 A E G - P・Q）

2746	3×(2)	N 1°E		—	2.3	2.6	平安後	
2745	(4)×2	E 4°S	—	4.4	2.25	2.2	平安末	
2756	(2)×2	N 10°E	—	4.4	2.2	2.2	〃	
2732	(3)×3	E 0°	—	5.7	2.1	1.9	鎌 倉	総柱建物。柱掘形内に扁平な石あり。

第46次調査（6 A G N - C・D）

2390	3×2	E 2°N	6.0	4.0	2.0	2.0	平安前	S B 2391より新しい
2391	3×2	E 2°N	5.4	3.8	1.8	1.9	〃	
2392	3×2	E 2°N	4.5	3.2	1.5	1.6	〃	
2780	(4)×4	N 5°W	—	7.32	2.1	1.8	〃	総柱
2785	2×2	E 4°N	2.8	2.4	1.4	1.2	〃	
2790	(4)×2	N 4°W	—	4.3	2.2	2.15	〃	
2795	3×—	E 3°N	5.4		1.8		〃	

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 間		
2796	－×2	N3°W		5.4		2.7	平安前	総柱
2805	3×2	E2°N	6.0	3.8	2.0	1.9	〃	
2810	3×3	E2°N	5.1	4.8	1.7	1.6	〃	
2388	－×2	E8°S		3.8	2.3	1.9	平安末	
2389	3×2	E2°N	6.0	3.8	2.0	1.9	不 明	
2781	－×2	N3°W		4.2		2.1	〃	
2800		E4°N			2.95		平安前	柵列 S B2780より新しい

第47次調査（6 A E P－H）

2849	(2)×2	E3°N	－	4.9	2.45	2.45	平安前	
2852	(3)×2	E1°N	－	3.8	1.8	1.9	平安中	

第47次調査（6 A D L－E・O）

2855	(3)×2	E13°S	－	4.4	2.2	2.2	平安後	
------	-------	-------	---	-----	-----	-----	-----	--

第47次調査（6 A D L－J・M）

2866	3×(2)	E5°S	7.3	－	2.4	2.5	平安中	S B2870の建て替え
2867	5×－	E4°S	12.0	－	2.4	－	〃	
2868	(3)×2	N6°E	－	4.7	2.4	2.35	〃	
2869	4×－	E3°S	7.4	－	1.85	－	〃	
2870	4×－	E3°S	7.4	－	1.85	－	〃	
2871	3×－	E4°S	5.6	－	1.87	－	〃	
2873	(4)×－	N6°E	－	－	2.1	－	〃	
2872	3×－	E3°S	6.0	－	2.0	－	平安後	

第47次調査（6 A D K－B）

2878	3×－	E2°N	4.8	－	1.6	－	平安末	
------	-----	------	-----	---	-----	---	-----	--

第43－4次調査（6 A D S－D）

2910	－×－	N1°E	－	－	－	－	平安前	
2905	－×2	N1°E	－	4.0	－	2.0	平安中	

第43－8次調査（6 A D Q－H）

2925	(2)×2	E6°S	－	4.2	－	2.1	平安前	
2929	(3)×2	N7°E	－	4.2	－	2.1	〃	
2930	(4)×2	N3°E	－	3.6	－	1.8	平安後	
2933	(2)×2	N4°E	－	3.6	－	1.8	不 明	
2934	(2)×2	N4°E	－	3.2	－	1.6	〃	
2935	(2)×2	N13°E	－	3.6	－	1.8	〃	

竪穴住居一覽表

S B	規模(m)	長軸方向	深さ(cm)	柱 穴	カマド	時 期	備 考
第45次調査 (6 A E G - P・Q)							
2726	2.4×2.2	E 5° S	15		西 壁	奈 良	
2738	3.2×2.8	N 1° E	30		北 壁	平安末	
第47次調査 (6 A D L - E・O)							
2854	2.8×2.7	E 32° S	20			奈良末	
第43 - 3次調査 (6 A C P - T)							
2899	4.0× -	E 4° S	25	-	-	奈 良	
2901	- × -	-	15	-	-	〃	

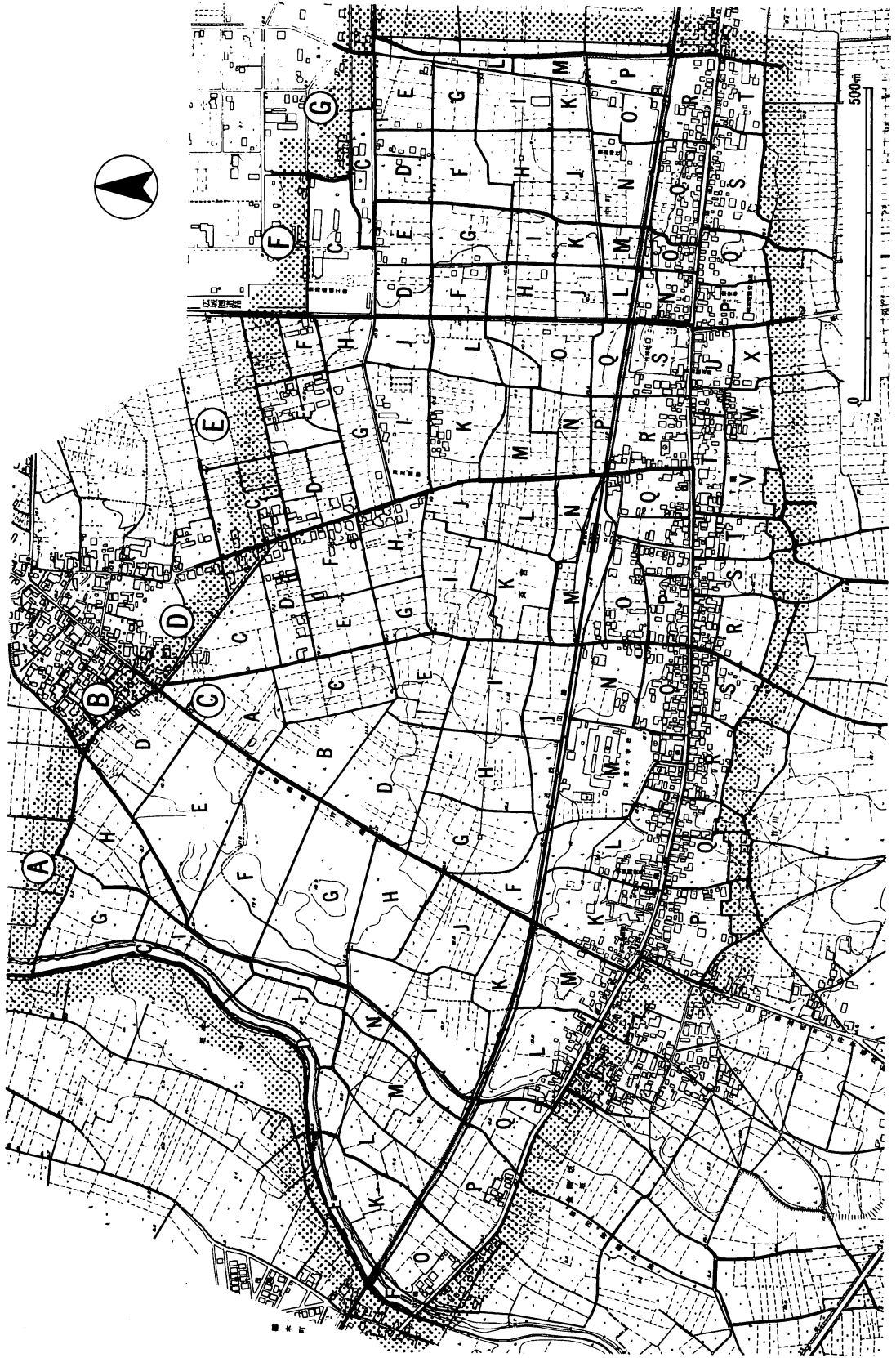
三重県遺跡標示一覽表

時 代		種 別 と 地 区					
0		A 国 郡 衙		K 北 勢		T 伊 勢	城
1	先 縄 文	B 伊 勢 寺		L 中 勢 墳		U 志 摩 熊 野	砦 館
2	縄 文	C 志 摩 熊 野		M 南 勢		V 伊 賀	館
3	弥 生	D 伊 賀 院		N 志 摩		W 記 念 物	
4	古 墳	E 北 勢 集		O 熊 野 墓		X 交 通	
5	飛 鳥	F 中 勢 落		P 伊 賀		Y	
6	奈 良	G 南 勢		Q 伊 勢	製	Z そ の 他	
7	平 安	H 志 摩		R 志 摩 熊 野	造		
8	鎌 倉	I 熊 野		S 伊 賀	所		
9	室 町 以 降	J 伊 賀					

斎宮跡発掘次数一覧表

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
1	45	試掘	13-4	51	楽 殿2916～2917 (松井)
2	46	古里A地区	13-5	"	御 館2974-1 (川本)
3	"	" B地区	13-6	"	中垣内 375-1 (南)
4	47	" C地区	13-7	"	東裏 328 (小川)
5	48	" D地区	13-8	"	西加座2771-1 (細井繁久)
6-1	"	Aトレンチ	13-9	"	" 2773 (細井国太郎)
6-2	"	Bトレンチ	13-10	"	東裏363-1、362-1 (児島)
6-3	"	Cトレンチ	13-11	"	西加座2681-1 (浮田)
6-4	"	Dトレンチ	13-12	"	" 2721-3、2724-2 (森川)
6-5	"	Eトレンチ	13-13	"	東前沖2506-2 (宮下)
7	49	古里E地区	14-1	52	2 Eトレンチ
8-1	"	Fトレンチ	14-2	"	2 Fトレンチ
8-2	"	Gトレンチ	14-3	"	2 Gトレンチ
8-3	"	Hトレンチ	14-4	"	2 Hトレンチ
8-4	"	Iトレンチ	14-5	"	2 Iトレンチ
8-5	"	Jトレンチ	15	"	斎宮小学校
8-6	"	Kトレンチ	16-1	"	竹川町道A
8-7	"	Lトレンチ	16-2	"	" B
8-8	"	Mトレンチ	16-3	"	" C
8-9	"	Nトレンチ	16-4	"	" D
8-10	"	Oトレンチ	16-5	"	" E
8-11	"	Pトレンチ	16-6	"	" F
9-1	50	Qトレンチ	17-1	"	竹神社社務所
9-2	"	Rトレンチ	17-2	"	竹神社防火用水
9-3	"	Sトレンチ	17-3	"	西加座2721-6 (西沢)
9-4	"	Tトレンチ	17-4	"	楽 殿2894-1 (中川)
9-5	"	Uトレンチ	17-5	"	" 2895-1 (西口)
9-6	"	Vトレンチ	17-6	"	出在家3237-3 (吉川)
9-7	"	Wトレンチ	17-7	"	" 3237-1 (里中)
9-8	"	Xトレンチ	17-8	"	楽 殿2894-1 (西村)
9-9	"	Yトレンチ	17-9	"	東海造機
9-10	"	Zトレンチ	18	53	6 A E L-E・I (下園)
10	"	広域圏道路	19	"	6 A E N-M・N・O (御館)
11-1	"	西加座2661-1 (山中)	20	"	6 A E O-I・J (柳原)
11-2	"	" 2681-1 (山名)	21-1	"	6 A G N-B (鍛冶山、中山)
11-3	"	東前沖2483-2 (前田)	21-2	"	6 A F I-D (西加座2711-2 2717-4 他山路)
11-4	"	下 園2926-9 (吉木)	21-3	"	6 A F D-D (西前沖2649-1 大西)
12-1	51	2 Aトレンチ	21-4	"	6 A F H-F (西加座2678、 2679-3 森下)
12-2	"	2 Bトレンチ	21-5	"	6 A G D-K (東前沖、渡部)
12-3	"	2 Cトレンチ	21-6	"	6 A C A-T (古里3269-2、中西)
12-4	"	2 Dトレンチ	21-7	"	6 A F E-F (東前沖2631-1 鈴木)
13-1	"	東加座2436-7 (浜口)	21-8	"	6 A E G-A (楽殿2909-3 大西)
13-2	"	" 2436-4 (中村)	21-9	"	6 A E D-R (篠林3218-3 宇田)
13-3	"	古 里3283 (村上)	22-1	"	6 A G U

次	年次	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
22-2	53	6AGU	32	55	6ACE-D・E・F (塚山)
22-3	"	6AGW	33	"	6ADE-C・D他 (篠林)
23	54	6AEL-B (下園)	34	56	6AFK-F・G・H (西加座)
24	"	6AGF-D (西加座)	35	"	6APE他 (西前沖)
25-1	"	6ADP-K(牛葉3029-1、三重土地ホーム)	36	"	6ABI-F (中垣内)
25-2	"	6ACA-Y(古里3270、脇田)	37-1	"	6AFC-M(前沖2604、日本経木)
25-3	"	6ADD-F(篠林3139-3、池田)	37-2	"	6ADQ-R(牛葉3021-2、野田)
25-4	"	6AER-H(牛葉3014、牛葉公民館)	37-3	"	6AFC-F(西前沖2604-6、押田)
25-5	"	6AGN-H(鍛冶山2392、丸山)	37-4	"	6AFC-M(西前沖2604、日本経木)
25-6	"	6AFH-A(西加座2675-5、谷口)	37-5	"	6AFC-G(西前沖2604-7、中村)
25-7	"	6AEK-V(下園2926-10、奥田)	37-6	"	6ABD-A(古里588-2、北藪)
25-8	"	6AFC-D(西前沖2064-5、山本)	37-7	"	6AEC-M(荻干2861-2、斎王公民館)
25-9	"	6ACN-C(広頭3387-1、北出)	37-8	"	6ADR-P(木葉山128-8、13、14、富山)
25-10	"	6AEV-A(鈴池339-1、永島)	37-9	"	6AGK-E(東加座2355-1、竹内)
25-11	"	6ACF-B(東裏364-1、沢)	37-10	"	6AED-O(楽殿3217-1、渡辺)
25-12	"	6AEE-Y(楽殿2892-3、山本)	37-11	"	6ADN-O(内山3043-3、斎宮駅)
25-13	"	6AFJ-E(西加座2766-1、山内)	37-12	"	6AFH-J(西加座2681-1、3、4、渋谷)
26-1	"	6AFR (中西)	37-13	"	6AGK-F(東加座2385-3、2386-3、竹内)
26-2	"	6AEX~6ACQ(鈴池、木葉山、南裏)	38	"	6ACD-S (塚山)
26-3	"	6AEV・W・X (鈴池)	39	"	6ABD-R・S・T (古里)
26-4	"	6ACR (木葉山・南裏)	40	"	6AGH-L・M (東加座)
27	"	6ACG-S・T (東裏)	41	"	6AGJ-J他 (斎宮地内)
28	"	6AEO-D (柳原)	42-1	57	6AEI-D・F (楽殿)
29	"	6AFI、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ	42-2	"	6AEK-A・B (楽殿)
30	55	6ABJ-M・X・W(中垣内)	43-1	"	6ADC-C (出在家3235-2、永田)
31-1	"	6ADO-M(内山3038-13、岩見)	43-2	"	6ADT-B (木葉山308-1、山本)
31-2	"	6ACP-I(南裏227-2、鈴木)	43-3	"	6ACP-T (南裏241-1、辻)
31-3	"	6ABD-A(古里588-4、北藪)	43-4	"	6ADS-D (牛葉123-3、西山)
31-4	"	6ADQ-T(牛葉3018-2、百五銀行)	43-5	"	6ADE-D (篠林3220-3、澄野)
31-5	"	6ACC-G(塚山3338-3、水谷)	43-6	"	6AGE (東前沖、町道測溝)
31-6	"	6ABO-X(古里576-1、池田)	43-7	"	6ABD-F (古里588-6、今西)
31-7	"	6AGI-L(東加座2427-1、竹内)	43-8	"	6ADQ-H (牛葉3025-2、大西)
31-8	"	6ACN-G(広頭3388-1、5、8、9、森)	44	"	6ADP-A・B(鍛冶山2759-1、他)
31-9	"	6AGD-L(北野2487-1、中川)	45	"	6AEG-P・Q(楽殿2904-2、他)
31-10	"	6ADM-O(内山3043-3、斎宮駅)	46	"	6AGN-C・D(鍛冶山2737-1、他)
31-11	"	6ADT-I(木葉山304-2、澄野)	47	"	6ADJ-D・G他(西加座、御館、宮之前、上園)
31-12	"	6ADT-J(木葉山304-7、宇田)			



嘉源地区表示

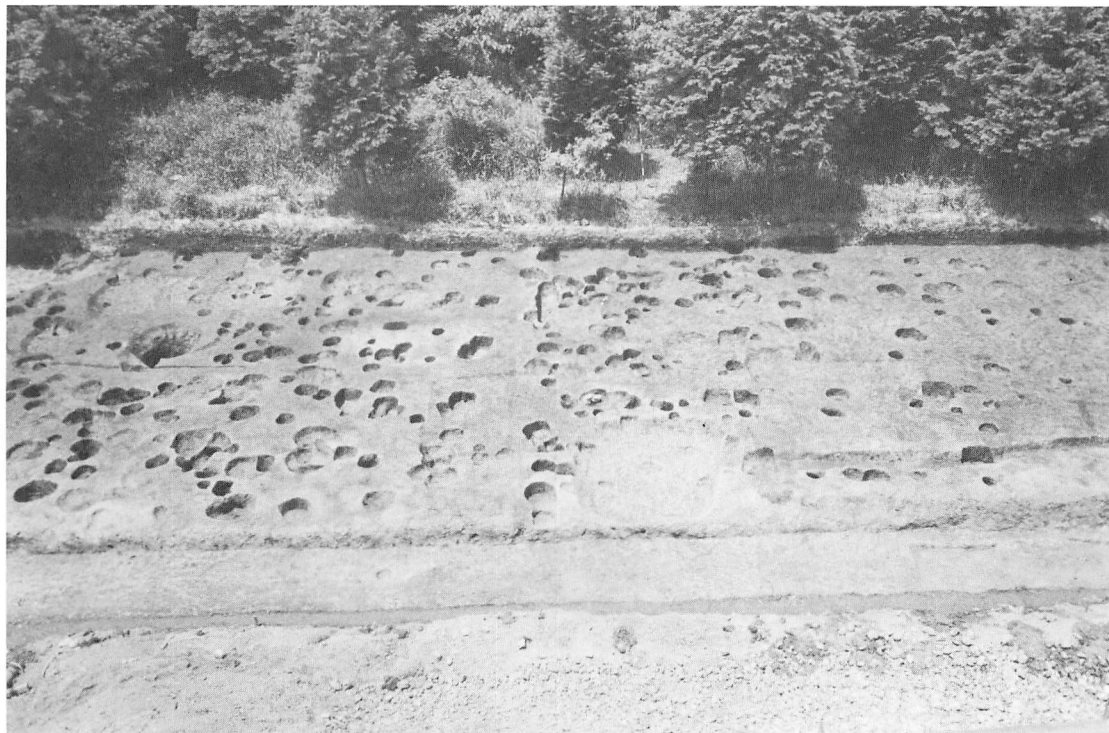
版 図



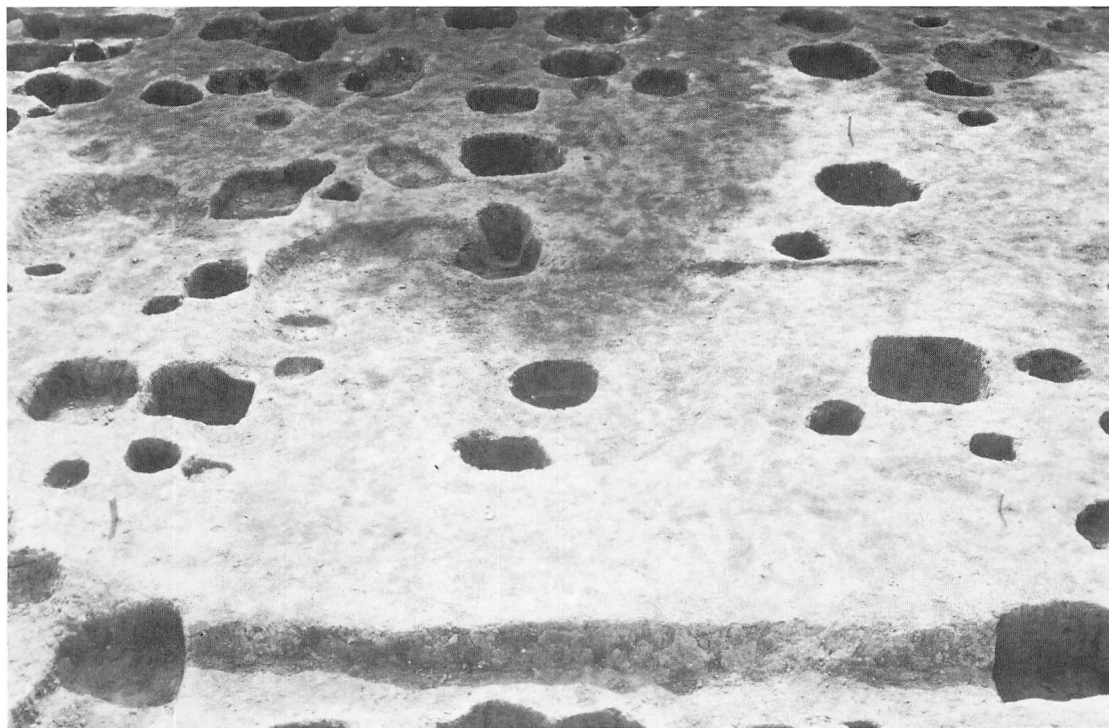
第46次調査全景 (東から)



環境整備事業 (北から)



全 景 (東から)



S B 2603 (東から)



S B 2616 (南から)



全 景 (北から)



S D 2625 (東から)



全 景 (南から)



全 景 (東から)



全 景 (西から)



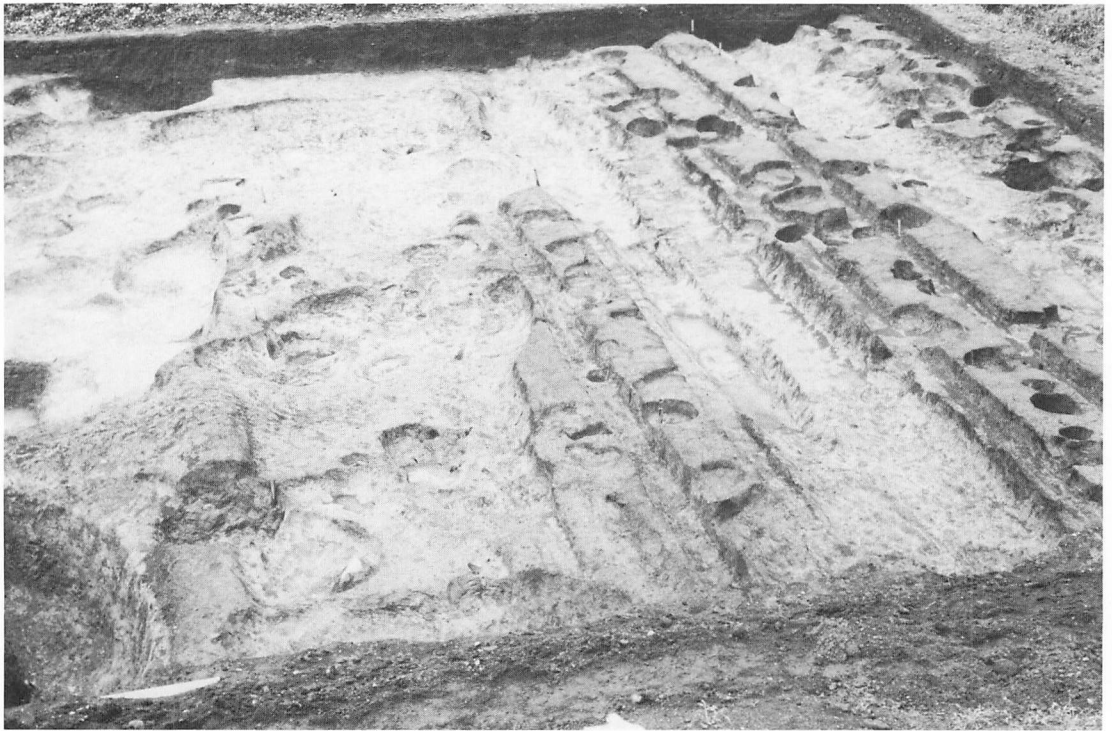
調 査 風 景



調査区東半 (北から)



SA 1411 SA 2675 (北から)



調査区西半 (北から)



SE1405 SD2660 SD2670 (北から)



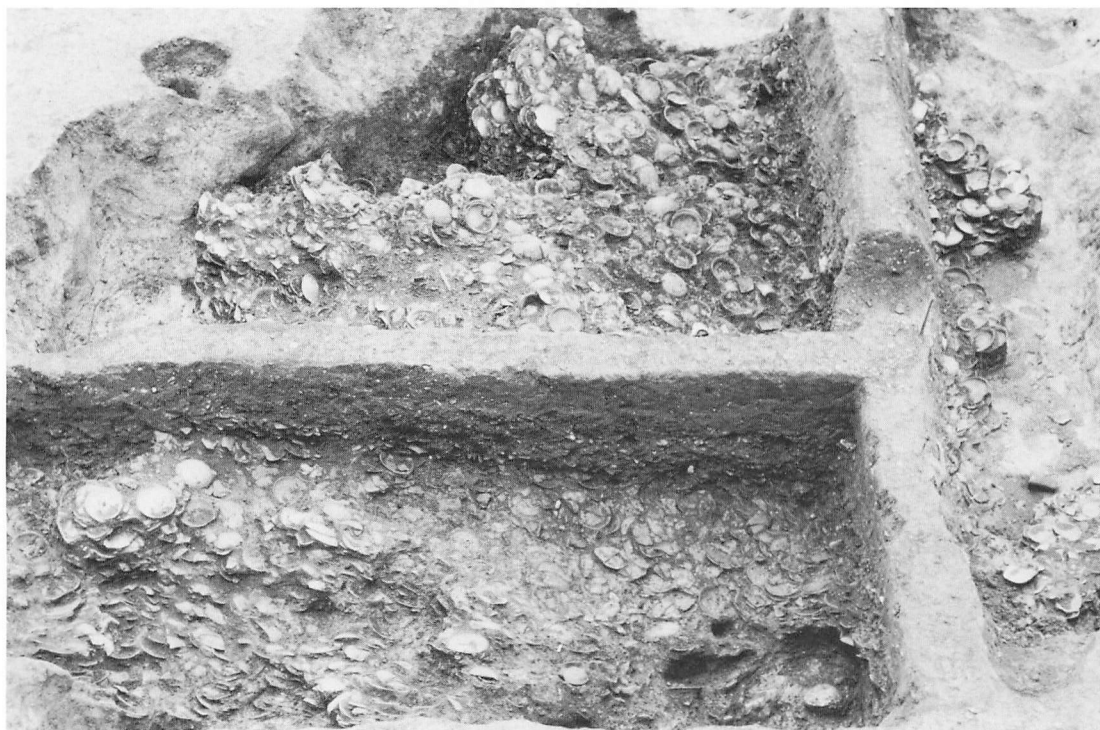
S B 2690 (北から)



S B 2691 (東から)



S K 2695 S K 1424 (東から)



S K 2650 (東から)



全 景 (北から)



S X 2735 S X 2734 (北から)



S D 32 S D 33 S D 2723 (南から)



S B 2746 (南から)



S B 2732 (南から)



S X 2734 (東から)



全 景 (南から)



S D2400 (東から)



S A 2800 (南から)



S B 2780 S B 2810 (西から)



S B2780 (東から)



S B2780 (北から)



S B 2810 (北から)



S B 2790 (北から)



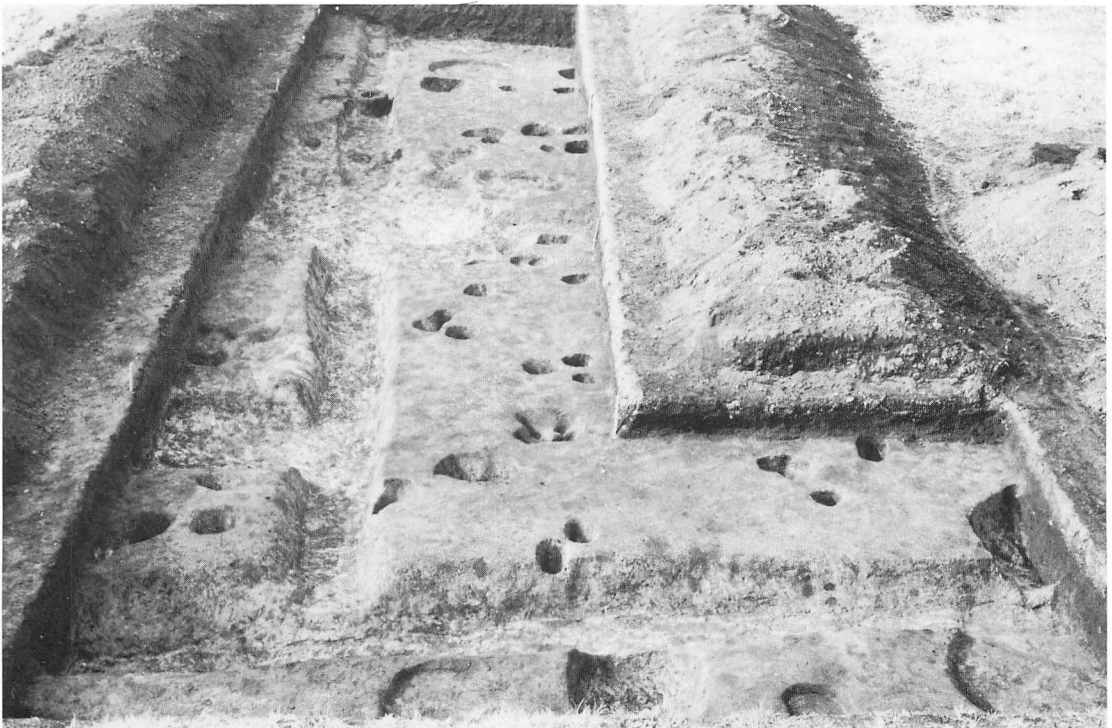
S B 2389～S B 2392 (北から)



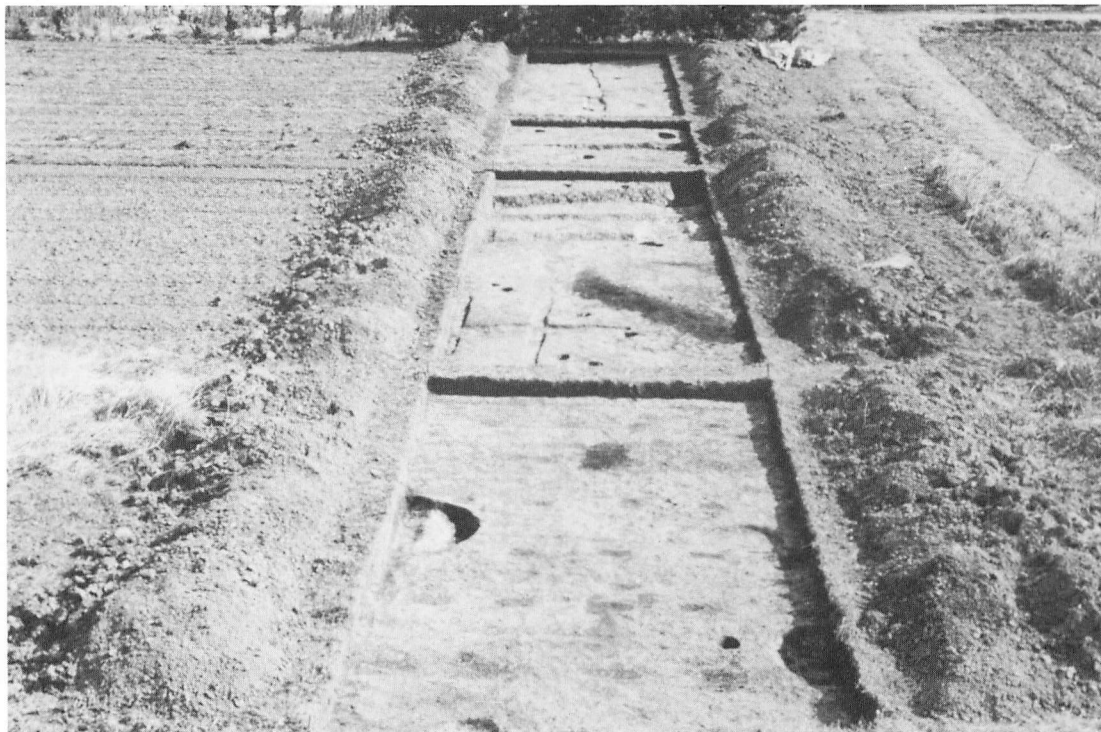
S B 2785 S K 2786 (西から)



6 A F G - P・Q地区 (東から)



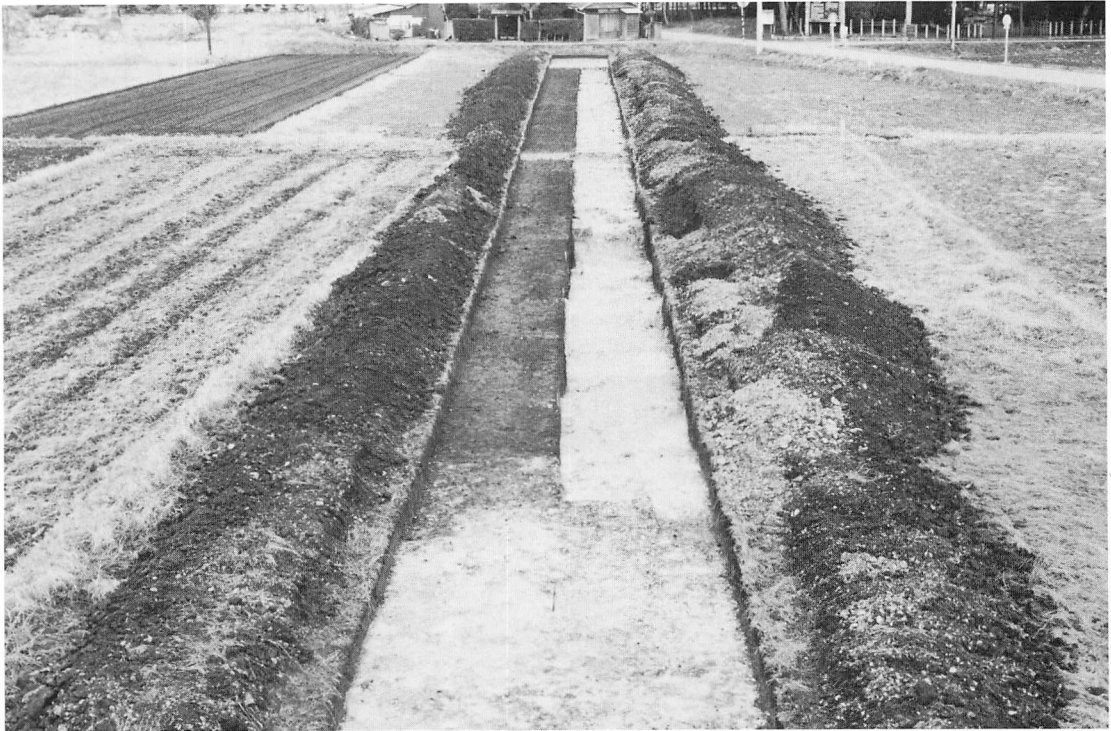
6 A F K - K地区 (東から)



6 A E K - X 地区 (西から)



6 A E P - H 地区 (北から)



6 A D J - D ・ G 地区 (南から)



6 A D L - E ・ O 地区 (北から)



6ADK-K 6ADL-J・M地区 (西から)



6ADK-B地区 (西から)



第43- 1 次調査 (南西から)



第43- 2 次調査 (南から)



第43-3次調査 (北から)



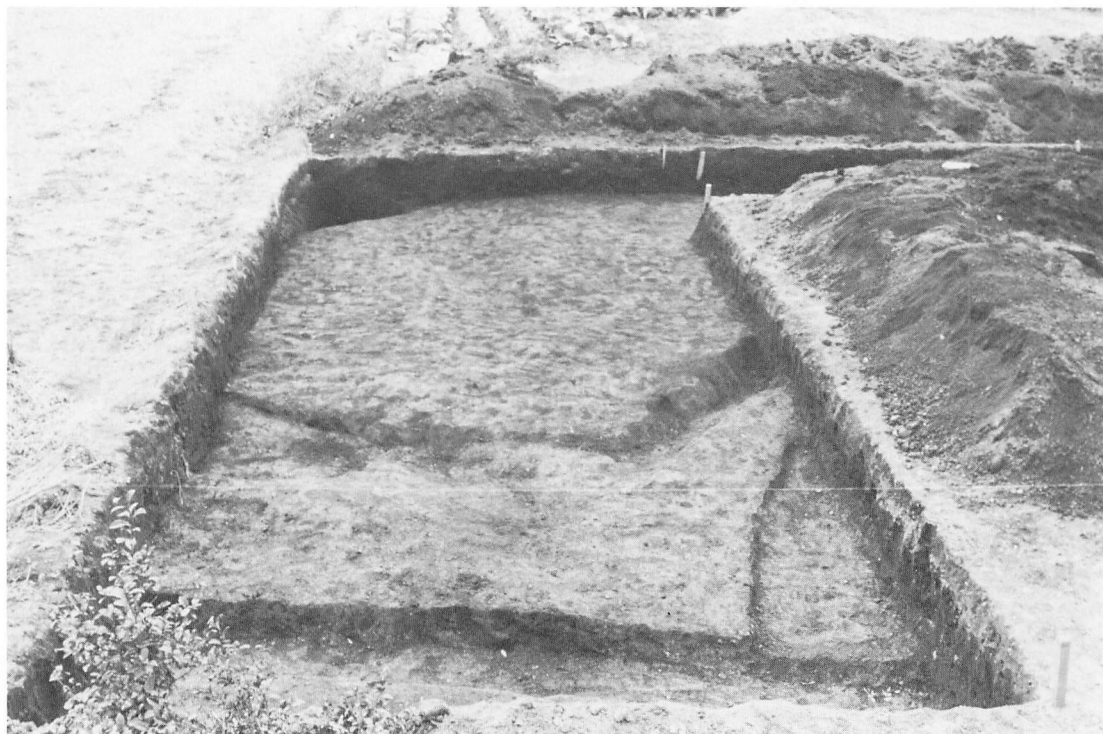
第43-4次調査 (西から)



第43- 5 次調査 (南から)



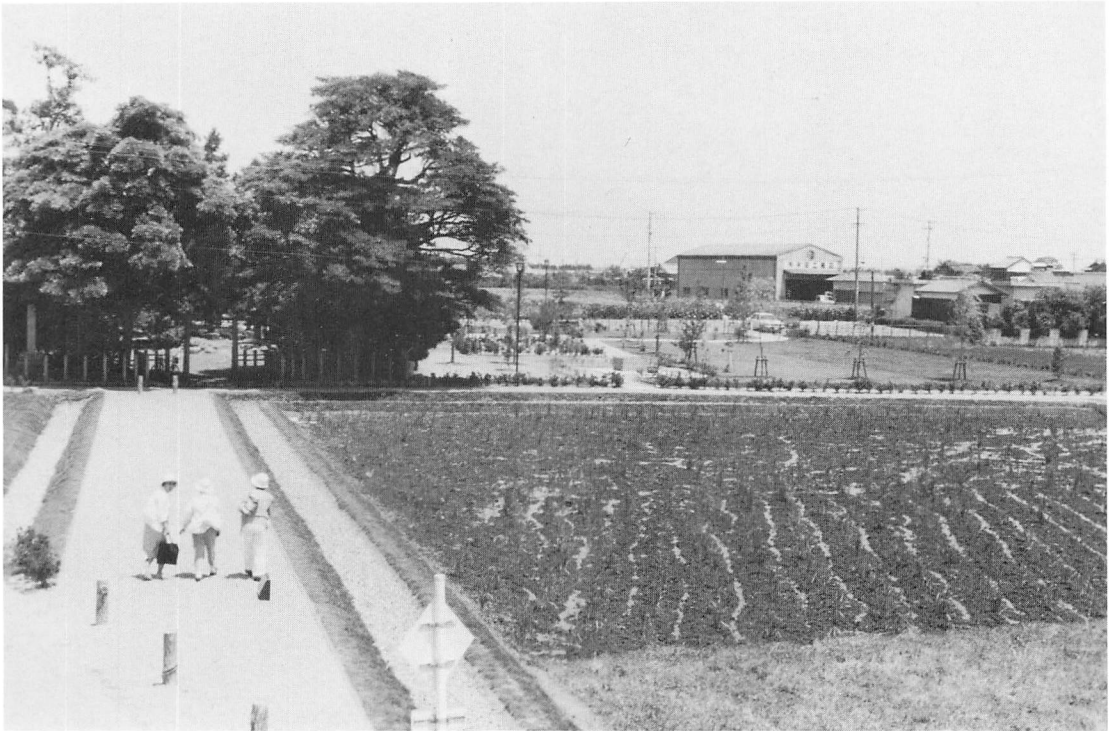
第43- 6 次調査 (東から)



第43-7次調査 (北から)



第43-8次調査 (東から)



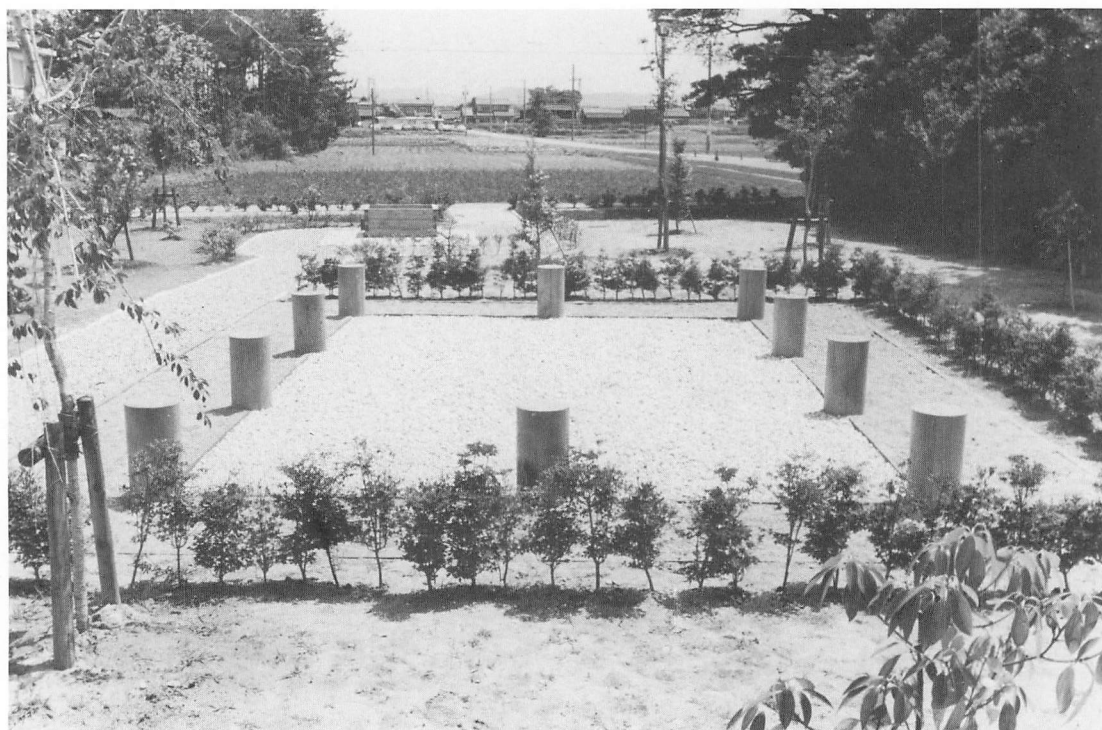
全 景 (南から)



芝生広場 (東から)



S B 2603 (西から)



S B 2616 (北から)



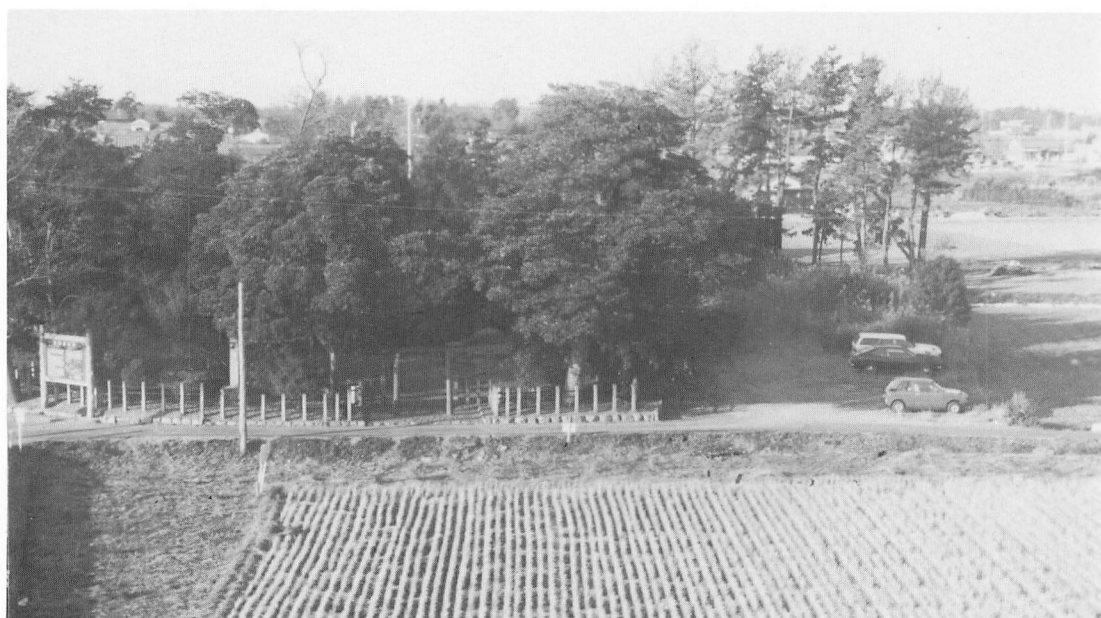
S E 2622 (南から)



古道 S D2625 (西から)



遊歩道 (北から)



整備前風景 (南から)

三重県齋宮跡調査事務所年報 1982

史 跡 齋 宮 跡

——発掘調査概報——

昭和58年 3 月31 日

編集発行 三重県齋宮跡調査事務所

印 刷 光 出 版 印 刷
